女子新國文

新訂版

巻三

375.9
Ha17
資料室

42331
教科書文庫
4
810
42-1935
200030
2416

資料室
375.9
Ha7

文部省檢定濟
昭和十年十一月十二日　高等女學校國語科用

文學博士　芳賀矢一　編
東京帝國大學教授
文學博士　橋本進吉　訂補

女子新國文

新訂版

東京　合資會社　冨山房發兌

太田垣蓮月
羽石弘志筆

広島大学
教
53579
図書

女子新國文 新訂版 卷三

目次

一 四方の海（明治天皇御製）……二
二 明治天皇の御製に就いて……五
三 千里の春……大和田建樹……九
四 お遍路さん……荻原井泉水……一五
五 郊外小景（詩）……山村暮鳥……二一
六 蛙の聲……近松秋江……二三
　一 蛙の聲……三

二　山吹の花……二六
三　筍……二八
九官鳥と鶯（自修文）……土岐善麿……三一
七　山寺の鳥の聲……若山牧水……三五
八　篤實……橘南谿……四三
九　親の慈愛……柳澤淇園……五一
一　親の慈愛……五三
二　朝顔……五四
三　世渡る業……五五
四　土器賣る翁……五七
一〇　幸福……栗原古城……五七

一一　偉人野口英世……野口英世……六五
母を故國に省みて（自修文）……野口英世……七三
一二　樂地……幸田露伴……八三
一三　子羊の群（詩）……福田正夫……八六
一四　繪畫の感化……那珂通高……八八
一五　同情……九五
一六　人の新盆に（書翰文）……佐佐木信綱……一〇一
一七　桃源鄉伊豆の大島……有島生馬……一〇三
一八　夏空を飛ぶその一……鈴木文史朗……一〇九
一九　夏空を飛ぶその二……鈴木文史朗……一二六
飛行機の話（自修文）……一二四

二〇　山二題……足立源一郎…一三四
二一　蟲　賣(詩)……伊良子清白…一三九
二二　太田垣蓮月尼……田中嘉三郎…一四一
二三　東郷元帥とその母その一……小笠原長生…一四八
二四　東郷元帥とその母その二……小笠原長生…一五七
　　東郷元帥の墓に詣でて(自修文)……水町京子…一六四
二五　日本の至寶……德富蘇峯…一七一
二六　祖先を崇び家名を重んず……一七八

女子新國文　新訂版　卷三

一　四方の海（明治天皇御製）

よもの海みなはらからと思ふ世に
　など波風のたちさわぐらん

など波風の……さわぐらん

橿原のとほつみおやの宮柱
　たてそめしより國はうごかず

子らはみな軍のにはにいでははて
　おきなやひとり山田もるらん

おきなや……山田もるらん

世とともに語りつたへよ國のため
　いのちをすてし人のいさをゝ

まつりごといでて聽く間はかくばかり
　あつき日としも思はざりしを

あつき日としも

よりそはんひまはなくとも文机の
　上には塵をすゑずもあらなん

塵をすゑずもあらなん

さしのぼる朝日の如くさわやかに
　もたまほしきは心なりけり

もたまほしきは心なりけり

あさみどり澄みわたりたる大空の
　ひろきをおのが心ともがな

おのが心ともがな

おこたるなゆめ

後にこそ……立つべかりけれ

學ばなん

家とみてあかぬことなき身なりとも
ひとのつとめにおこたるなゆめ

おのがじし務をへし後にこそ
花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん
しづがなりはひいとまなくとも

とこしへに民やすかれと祈るなる
わがよをまもれ伊勢のおほ神

おありなさる

凌駕し給ふ

驚歎し奉る

家隆　藤原家隆。鎌倉時代初期の歌人。新古今集撰者の一人。嘉禎三年（一八九七年）歿、年八十。

二十一代集　古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續古今、續後撰、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、續風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、續古今の敕撰二十一和歌集。

二　明治天皇の御製に就いて

明治天皇の御製が十萬首もおありなさるといふ事は、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一として、驚歎し奉るより外はない。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも一の神業である。古來、最多作の歌人と言はれた家隆卿さへ、天皇に比べ奉れば、ものの數でもない。歷代の敕撰二十一代集の歌の數が總數三萬數千首、その幾倍の數を御一人でお作り上げになつたのは、眞に人間業ではない。かばかり多數な御製が、最も多事な明治の御治世に於て、萬機御親裁の餘になつた事を考へ奉れば、その御精

…であらせられた
お進めあそばした
お示しになつた
おはして

力の絶倫であらせられた事、何時の世、どこの國にも類例はない。皇威を四方に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進めあそばした大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示しになつた事は、億兆の欽仰し奉るところ、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられた事は言ふまでもないが、かばかり多數な御作のあつた事は、平素何等の娯樂をも近附け給はず、酷暑、嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出もなく、常に宮中におはして、唯一の御慰とせられたのが卽ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多い事で、且またその神々しい御性格をうかゞひ奉る事が出來る。御製を拜誦

拜察する
踐ませ給ふ
ルーズベルト Theodore Roosevelt 第二十六期の大統領（西紀一八五八—一九一九年）

し奉る者は、一言一句、これが卽ち萬機親裁の餘、お寬ぎあそばした御日常の御慰安であつた事を拜察しなければならぬ。

日常の御慰安の爲にお詠みあそばした數々の御詠、その風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作とうかゞはれる。國を思ひ、民を憐ませ給ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。一首の歌が米國大統領ルーズベルト氏を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれた力を示したもので、和歌始つて以來未曾有な事である。まして七千萬の國民が日常拜誦し

て、自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並ぶものはない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これ程の貴さが、何時の世どこの國にあらうか。

これ程の貴さが……あらうか

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。しかし、詔勅にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のある事も明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これを拜誦する者は、卽ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

拜聽する

三　千里の春

大和田　建樹

大和田建樹　明治時代の國學者。舊宇和島藩の人。明治四十四年（一九一一年）歿、年五十四。

春晴千里、山また山、水また水。近き水は澄みて山の線を浮べ、遠き山は霞みて水に藍を流す。東京を發せし我が汽車は、この間に一線を引きて、今や東海道を下りつゝあり。海に面して窓による客、筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、そも〳〵繪か。

東京を發せし

下りつゝあり

寫し出せるは

そも〳〵

七砲臺のあたり、波穩かにして、高く低く群飛ぶかもめ、落花の風に飜へるに似たり。帆を半ば張りて出行く舟あり、櫓を操りて横切る舟あり。房總二州の山々は霞に消えて、探れども見えず。

七砲臺　東京市品川區品川の沖にある七つの臺場。江戸幕府の末頃に海防の爲に幕府の築いたもの。

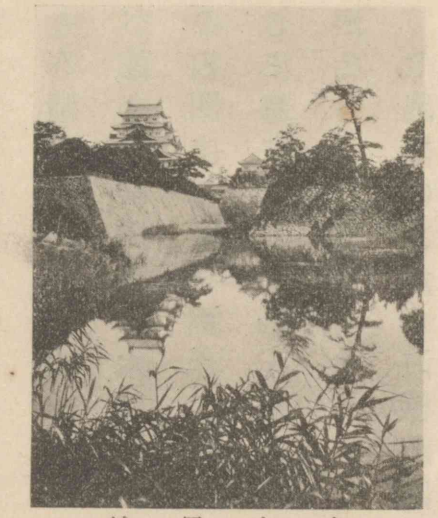
謝せんとす

三保の松原
静岡縣清水市の東南方に突出した砂嘴。

造化の妙筆にもれん

遠く幽かに横たはれるは伊豆なるべし

松青き所、色どり添ふるに桃の紅なるを以てす。自然はこれ等の美を贈りて旅客を慰め、詩人はその美を詠じて春に謝せんとす。



名古屋城

三保の松原けぶりわたりて、春は繪の如し。磯に碎けて、折れ返る波、波路の末に浮立つ雲、何物か造化の妙筆にもれん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。遠く幽かに横たはれるは伊豆なるべし。富士は水彩もて描かれたるが如く、窓の右に立ち、また左に現る。

麥は綠に
熱田の社。熱田神宮。名古屋市南區熱田にある官幣大社。

彦根
滋賀縣犬上郡。琵琶湖東北岸の町。

草津
同縣栗太郡。琵琶湖東南岸の町。

瀨田川
琵琶湖の東南隅から流れ出て、宇治川となり大阪灣に注ぐ。淀川

朝日將軍の遺蹟
木曾義仲の戰死の場所、墓等。

鳩の浦
鳩の海。琵琶湖の異稱。

粟津の松原
瀨田川の西岸。近江八景の一で木曾義仲戰死の場所。

東寺の塔
京都市下京區にある眞言宗東寺派の總本山教王護國寺の五重塔。

平原十里、麥は綠に菜の花は黃なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれ行けば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。

彦根去り、草津來り、瀨田川を渡れば、京都も早近くなりぬ。朝日將軍の遺蹟はいづれの所ぞ。霞に包まるゝ遠近の山影、或は淡く或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、粟津の松原獨り昔に似たり。

東寺の塔

東寺の塔は我を迎へて立ち、賀茂川の水は我を迎へて歌

似たるは

三條、四條　京都市中京區。賀茂川に架けられた三條大橋と、四條大橋。

つゝじ（躑躅）

如意ヶ嶽　京都市の東北方にある。大文字ともいふ。

影を落せり

清水觀音　京都市東山區にある法相宗の寺。

ふ。慕はしき母に會ひ、懷かしき妹と語るに似たるは、何時も京都に著きし時の心地なり。

二

山紫に水明らかなる所、たゞ夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡る事日に幾たびぞ。つゝじを柴に折添へて載きつれたる大原女も、何時しか我が友となれり。如意ヶ嶽より吹來る春風は輕く我が袖を拂ひ、また堤の柳を吹く。

うち續く晴天に、都の人々は春にあこがれて、西へ東へと群行く。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に水に影を落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を滿しぬ。舞臺の上より見下す人、舞臺の下

わらび（蕨）

御室　京都市右京區。ここに古義眞言宗の本山仁和寺がある。

嵐山　京都市の西部にある。

春こそたけなはなれ

に咲誇る花、恰も一幅の四條畫なるに、老婆はこの間に立ちて、「わらび餅召せ。」など叫ぶ。

西山の花見る人は、多くまづ御室を指す。松青く樓門赤く、茶を煮る煙絶え〳〵に上りて、花極めて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を說きて香雲の中に包まる。讀經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて生ひ立つ松、その間を點綴して咲誇る花、嵐山の春こそ今たけな

渡月橋

はなれ。小舟に乘りて漕行く人あり、岸の此方にて眺むる人あり。一すぢの渡月橋は花の如き人を載せて虹の如く、散る花は風に漂ひて主なき筏に落つ。坂を登りて大悲閣に到れば、眼下に廣げらるゝ一卷の繪卷物、柳櫻をこきまぜて、恰も錦を織出せる如く、また友禪を染めなせる如し。

眺むる

大悲閣　嵐山の中腹にある。柳櫻をこきまぜて云々　平安時代の歌人素性法師の歌「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春のにしきなりける」による。

途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて春もの寂し。暮色は東山を籠め、叡山を廻り、漸く賀茂川におそひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ。大文字の跡も姿を隱しぬ。紅に紫に藍に墨に、見る〳〵彩られ行く山影、薄く濃く、青く黑く消され行く人影、詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、顧みれば西山もなく北山もあらず。

廣隆寺　京都市右京區太秦にある眞言宗の別格本山。

紅に紫に藍に墨に……彩られ

（雪月花）

四　お遍路さん

荻原井泉水

りん〳〵といふさえた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――「お遍路さん」とは、何といふ親しみ深い言葉だらう。――四國八十八箇所に遺された弘法大師の靈場を遍歷して歩くのがお遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とは言へ、四國を一巡する事は、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得

荻原井泉水　俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。音が……聞える

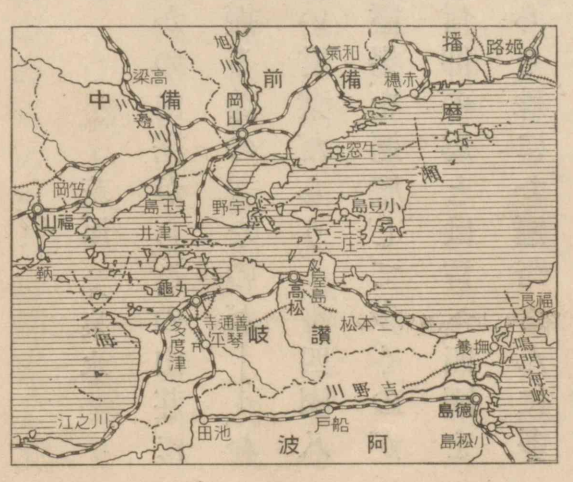
弘法大師　初期の高僧。平安時代空海。讃岐の人。名は承和二年（一四九五年）寂、年六十二。延喜二年十一年（一八一五年）弘法大師の諡號を賜はつた。

小豆島　香川縣小豆郡。瀨戸内海中にある最も大きな島。

……にしても

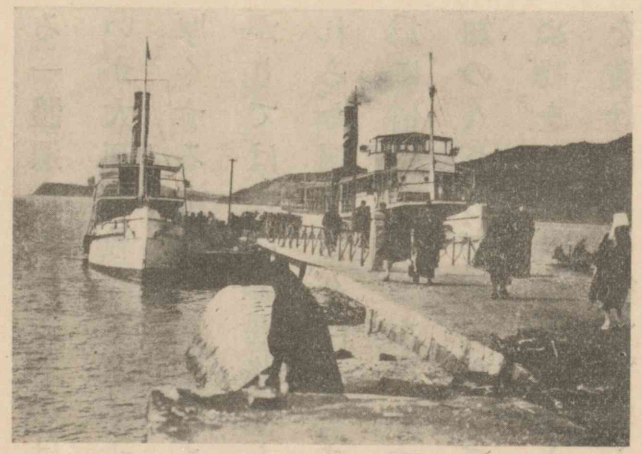
る事とされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふ事である。多くは岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港（とのしやう）に著く。其所から發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いの

土庄港
小豆島第一の都會。岡山から十八浬、高松から十二浬。



風も日も……四月頃
のどか（長閑）

は何十人と團體をなして、銀のやうな日の光を浴びながら、海の近い麥畑の中の路をたどつて行く。それは繪である。美しい事である。この山莊にまで聞えるりん〳〵といふさえた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものとみえる。



土庄港

お遍路さんは時を限らないが、風も日ものどかに、路を歩くのによい氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふ事だ。この

頃島に著く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものは、何時頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上から言つても、まことによい事だと思ふ。それはかりではない、お遍路さんは到る所で愛せられる。また惠まれる。お遍路さん同志もまたお互に遍路であるといふ事の爲に信頼する。また扶助する。これが實によい事だと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふ事だ。これは、遍路としての誰もが、一つの眞實の道

これは……意識から來るのだ

……そんなものは何もいらない

……事が……他にあるであらうか

に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參ずるには、知識も、修養も、資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも娘でも、男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事によつて、この尊い心持に一致する事が出來るのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しい事だ。爭鬪と欺瞞との滿ちた社會のうちにあつて、信頼と扶助とに心を合せて行くくらゐ美しい事が他にあるであらう

お遍路さん

負うて

（私たちは）……遍歴してゐるのである

私は思ふ、私たちは……學ばねばならない。

悉くが……心としないまでも

か。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

そしてこれは獨りお遍路さんの上の事だけではない。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならないものを負うて、自分の名前を書いた札を撒散らしながら、自分自分の路を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならない。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちはまづ彼等の信と愛とを以て人生を歩きたいものである。

（山水巡禮）

山村暮鳥

詩人。本姓名は土田八九十。群馬縣の人。大正十三年歿、年四十一。

五　郊外小景

山村暮鳥

とほくとほく、
天のはてに見える
山脈の
はつきりとした紫紺色、
そのいたゞきは
まつ白だ。

よく見ると、

その山かげからほそぼそと
一すぢのうすい煙が立つてゐる。
おや、あんなところにも、
自分たちとおなじやうな
人間がすんでゐるのだらうか。
それなら、
あの煙のしたには
鶏もないてゐるだらう、
子どももあそんでゐるだらう。
なんだか、

近松秋江
小説家。本姓名は徳田浩司。明治九年岡山縣に生れた。

そこがたいへん
いゝ國のやうな氣がしてならない。
この麥畑の徑を
まつすぐに、
どこまでもどこまでも
行つてみたいやうな氣がしてならない。

六　蛙の聲

近松秋江

一　蛙の聲

まだ氣候のよく定まらぬ時分に咲く櫻は、例年の通りや

一日として

たける（闌）

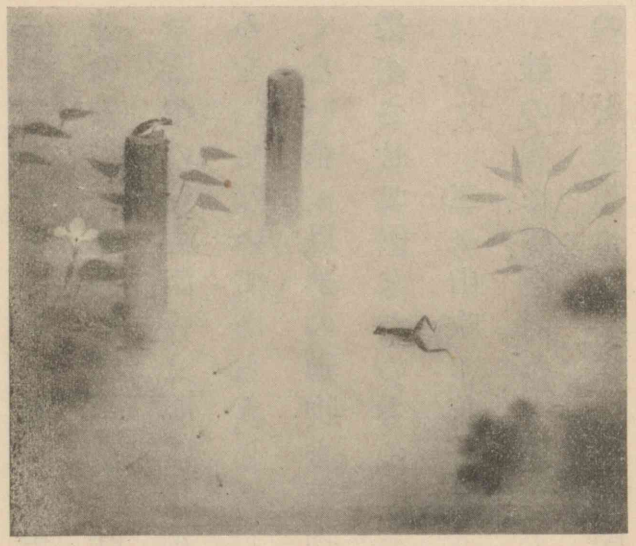
それは……含んでゐる

つと咲出したと思ふ間もなく、雨の爲にあへなく散つてしまつたが、二階の縁側に立つて遠くの郊外に眼を放つと、新緑の色が爽かに、遠近の森や籬落を點綴してゐる。これから懷かしい青葉の五月になるのだ。

この間ぢゆう、四月に入つてからも約半月ばかりの間、一日として春らしい美しい日影も見なかつたが、昨日今日は愈〻ほんたうの春が來た事を思はせるやうな麗かな日が照つてゐる。縁側に立つて、靜かに春たける風物を眺めてゐると、どこからともなく、遠くの方から蛙の鳴く聲が微かに聞えて來る。私はこの春先の蛙の鳴く聲を好む。それは、もの憂げな懷かしみのある、安らかな休息をさそふやうな音を含

車が……埋めてゐる

んでゐる。



水邊（酒井三良筆）

こゝらあたり郊外の田も、畑も、年々市人の住宅地になつて、今は高臺の下の低地にわづかばかりの田圃が埋め殘されてゐるばかりである。その田圃の際に、日々どこからか塵埃を積んだ車が來て、恐しい惡臭を放つ塵埃を捨てて、田を埋めてゐる。蛙の自由な棲息場は、その爲に日々蠶食され

て行くのである。蛙の聲は大方そつちの田圃から聞えて來るのであらう。人類の增殖は、勢ひ自然を破壞し、人類以外の他の動物を驅逐して行く。これは已むを得ぬ事であるが、また愛惜の感も深い。文明はどこまで進んでも、窮極するところを知らないであらう。しかし、我々は人間ばかりで住みたくない。我々以外の動物も、植物も、ならう事なら共に自由に榮えさせて置きたいものである。

……動物も植物も……榮えさせて置きたいものである

二　山吹の花

蛙の鳴く聲を靜かに聽いてゐると、私はおのづから山吹の花を聯想する。山吹の花の咲くのはちやうど今である。或山裾をめぐつて流れてゐる小溝に沿うて田舍路を歩いて

小溝に沿うて

ゐると、堰のほとりに山吹がしなやかな枝をかざしてゐて、綠の小草の茂つた畦で、蛙が假睡をさそふやうに、微かな聲で鳴いてゐる。淡紅色の蓮華草の咲亂れた田には、土手を溢れるやうな漫々たる春の水がしかけられて、農夫はやがて其所に挿秧の用意をしようとしてゐる。

私は田園を歩いてゐて、屢〻そんな畫的な光景に出會ふ。さういふ自然の情趣に惠まれてゐる所は、近畿の地方に多い。京都から奈良の方へ行く木津川近くの村里などには、特にそれが多いやうである。芭蕉が

山吹や宇治のほいろの匂ふころ

といつた句は、最もよくさういふ氣持を言表してゐる。

私は……出會ふ

木津川　淀川の一支流で、三重縣の北方に發し、西北流して京都、大阪の府境近くで淀川に合する。

ほいろ（焙爐）

……風味のあるのも……この頃である

雄健な勢に……感ずる

三　筍

筍の新しい風味のあるのも、またこの頃である。私は筍を味はふと言ふよりも、筍そのものを見るのが好きである。芭蕉も

筍や幼き時の繪のすさび

といつてゐる。多分幼い時に筍の繪を描いた事を思ひ出したものであらう。

私は筍の形や色、またそれ等を綜合した、あの若々しい、そして雄健な勢に無邪氣な興味を感ずる。幼い頃、村の子供と連立つて、よく竹藪の垣根を探して、筍狩をした事を懷かしく想ひ起す。雨にぬれそぼつた綠の荊棘の中から、恰も大地

私は……笑つてゐた

の底から生え出たもののやうに、すく〳〵として頭を現してゐるのを見出した時の悅を忘れ得ない。

私の故郷の家の裏の茶園の隅に、もう五十年も前に父が植ゑて置いた孟宗竹があつた。後に、屋敷の內に竹藪のあるのは家相によくないと言つて、根から堀取つてしまつた。しかし私は、屋敷の內に竹藪があつたとて、それが家相に障る道理はないと言つて、笑つてゐた。自分が家鄉を出てから既に四十年近くになる。それでもう悉く

筍（細合秀穀筆）

筍が……もたげる
足りる
目黒　今東京市目黒區。
松茸と筍との美味なのも

掘取られたと思つてゐたのだが、根が地中に少し殘つてゐたものと見えて、近年行つて見たら、また一かどの孟宗竹の藪が出來てゐた。そして早春の頃になると、一夜の春雨に、幼い筍が小牛の角のやうに、大地を割つて頭をもたげる。をりをりの總菜の用にも足りる。

東京では、府下の目黒が栗と筍との名所であつたが、今はだん〳〵開拓されて、そんな田園の趣味は跡形もなくなつた。京都地方は今でも、秋の松茸と共に筍の産地である。京都の筍は確かに美味である。松茸と筍との美味なのも道理で、京都近郊の松の葉の綠と、竹の幹の綠とは、他の地では見られぬ美しさである。京都近郊の山林の美は、この松と竹とで

土岐善麿、歌人、新聞記者。明治十八年東京市に生れた。
藪鶯　野生の鶯。
九官鳥　燕雀類の鳥。支那の原産。聲をよく眞似るので愛翫される。

ある。

自修文

九官鳥と鶯

土岐善麿

この鶯は或朝ひよつくり窓から書齋に飛びこんで來たのだ。わけもなく捕へられたので、そのまゝありあはせの小さい籠に飼ふ事にした。もとより藪鶯で、ろくな鳴聲も持つてはゐなかつたが、それでも「ほうほけきよう」と鳴く事は知つてゐた。水をやつたり、餌をやつたりしてゐるうちに、すつかり馴れて、朝の寢覺などに、夢現ともなく枕の上で聞いてゐるのが樂しみになつた。

茶の間の方には前から九官鳥が一羽飼つてあつた。「お早う」などはよく言へるやうになつてゐたが、この鶯が稍離れた書齋の方で「ほうほけきよう」と鳴くやうになつてから、じつと聞耳を立

息をふくめる　息を口の中に保つ。

てゐた九官鳥は、何時の間にか、鶯が「ほう……」と鳴きはじめると、すぐそのあとを承けて、「ほけきよう」ともの眞似のいたづらをするやうになつた。「ほう……」と息をふくめてから、さて「ほけきよう」とほがらかに歌はうとしてゐる鶯にとつて、このどこからともなく聞えるお先走りの自分の歌聲は、山深く返つて來る木魂とは違つたもので、不思議な薄氣味の惡いものだつた。「ほけきよう」を續けるのをやめて、最初の「ほう……」といふのを少し長く延して、あとの不思議な歌聲を待つてゐると、またきつと「ほけきよう」と、鏡の反射のやうに聞えて來る。鶯はこの怪しい不氣味さに堪へられなくなつて、遂に「ほけきよう」といふ歌

九官鳥　（鳥類寫生圖譜）

習性　ならはし。くせ。

不器用　わざのつたないこと。下手。

かしげる　傾ける。

聲を自分の脣から出す事を憚るやうになつた。「ほう……」と鳴いてはあとを續けずにあたりをきよろ〳〵と見廻す。九官鳥は初のうち、「ほけきよう」といふもの眞似を面白くも思つてゐたが、相手が歌はなくなつたので、自分も興がなくなつて、「ほけきよう」を鳴かなくなつたのだが、その間にほんたうの鶯の方はまた、自分の歌聲も忘れた氣持になつて、たゞ「ほう……」といふだけでやめてしまふ習性が附いてしまつた。

「ほう……」と鳴くだけで「ほけきよう」のない歌聲は、藪鶯としても餘りに不器用だが、その後、口笛で教へこまうとしても、なほ不思議がつて、どうしても相變らず「ほう……」といふだけしか鳴かない。

……これはH君の家での事なのだ。この間遊びに行くと、その書齋に鳥籠があつて、小さい鶯が首をかしげて「ほう……」と鳴い

不審（いぶかしいこと。合點の行かないこと。）

ふがひない（いふかひがない。いくぢがない。）

て、そのまゝ默つてしまふのを、不審に思つてきいたところが、こんな話をしてくれたのである。

一體九官鳥の本來の鳴聲は何といふのだらうか。鶯ならどんな藪鶯でも、「ほうほけきよう」と大抵は鳴くのだが、九官鳥は人間の話聲などの眞似は巧にするけれども、眞似はいかにうまくても、本來の鳴聲にはなりえない。「お早う」と呼びかけても、九官鳥は人間にならないと同樣に、「ほう……」のあとを承けて「ほけきよう」と鳴いても、やはり鶯にはならないのだ。「ほう……」と鳴いただけであとを眞似られた爲に「ほけきよう」を忘れてしまつた鶯も、ふがひないと言へば、ふがひないやうなものの、それでも鶯である事は、動かしがたい事實だ。「ほう……」といふ最初の歌聲まで、九官鳥は眞似る事があるかも知れない、またその「ほう……」といふのまでこの鶯は言はなくなつて、默々としてたゞ籠のうちに四邊

を見廻すやうになつてしまふかも知れない。

「どちらの生活が幸福なのですかね。」

「お伽噺みたやうな問答ですね。」

わたしはH君とこんな事を言つて、新しく運ばれた紅茶を飲んだ。

七　山寺の鳥の聲

若山牧水

（若山牧水　歌人。名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十五。）

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと、何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝手元の方へ耳を澄しても、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに鳴く鳥の聲が耳にはいつて來た。何とまあ、鳥の種類の多い

數へきれぬ

事だらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出してみても、とても數へきれぬ程の種々な音色が、枕の上に落ちて來る。私はこらへきれなくなつて飛起きた。そして雨戸を引きあけた。

照るともなく曇るともなく、燻り渡つた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ靜かに押並んで、見渡す限り微かな風のけはひもない。それからそれと眼を移してゐた私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る所を見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでと、その周圍はわからないが、とにかく煌々とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに靜かな眺なので、我を忘れてぼんやりとそこらを

靜かな眺なので

見廻してゐると、また一つのものが目にはいつた。眼前からすぐ落ちこんで行つてゐる窪地一帶は、ちやうど溪間のやうになつて、わづかの間杉木立がとだえて、細長い雜木林になつてゐるが、その藪の中をのそり〳〵と半身を屈めながら、何か探してゐる人がゐるのである。頭をまる〳〵と剃つた大男の、紛ふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて、大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。後庭におりて、かけひの前で顏を洗つてゐると、爺さんは青々とした野生のうどを提げて歸つて來た。「こんなものも」と言ひながら、筍をも二三本取出して見せた。

振向かう

うど（土當歸）

だの……だの

根本中堂　延暦寺の本堂。延暦七年（一四四八年）傳教大師の創建。

淨土院　傳教大師の廟。

四明ヶ嶽　比叡山の最高峯。海拔八二五メートル。

元黑谷　京都府愛宕郡八瀨村の東。

傳教大師　最澄のこと。近江滋賀の人。弘仁十三年（一四八二年）寂、年五十六。

この寺は比叡の山中に殘つてゐる十六七の古寺のうち、最も奥にあつて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけもちで、何か事のある時の外、めつたには登つて來ず、年中殆どこの寺男の爺さんが一人で留守居をしてゐるのである。四方たゞ杉の木があるのみで、しかも溪間の行きどまりになつた所にあるので、根本中堂だの、淨土院だの、釋迦堂だの、または四明ヶ嶽、元黑谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄る事なく、まる一週間滯在してゐる間、私はこのかな聾の爺さんの外、人間の顔を見る事なくして過してしまつた。

多いのはたゞ鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大

鋭くして澄み

師の一千一百年忌に當つたといふ舊い山、そして五里四方に亙ると稱へられる廣い森林、その到る所が殆ど鳥の聲で滿ちてゐる。

毎朝きまつて最も早く鳴くのが郭公である。「くわつこう、くわつこう」と鳴く。鋭くして澄み、しかもその間に何とも言ひがたいさびをもつたこの聲が、山や溪の冷い肌を刺すやうにして響き渡るのは、午前の四時前後である。この鳥の鳴く時、山は全く鳴りを靜めてゐる。「くわつ」と鋭く高く、さうして直ちに「こう」と引くその聲が、ほゞ二つか三つ或場所で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次には、違つた或頂上か、溪の深みに移つてゐる。暫くも同じ所にとゞまつてゐな

……を感ずる

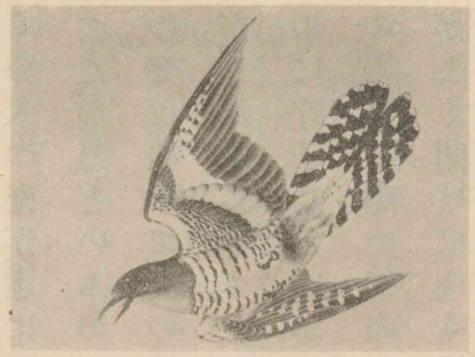
いそして殆どその姿を人に見せた事がない。

杜鵑も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては鳴かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取亂して鳴きたてる事がある。その時は、例の「ほつぞんかけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつて來る。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感ずる。この鳥は聲よりも、峯から峯、梢から梢へと飛渡る時の姿がまことによい。それから、高調子の聲にまじつて、何といふ鳥だか、大きさは燕程で、尾の一尺くら

郭公

……を見る

ゐ長いのがゐて、細々と、實に細々と息を切らずに鳴いてゐるのがある。これは下枝から下枝を渡つて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねてゐるのを見る。



杜鵑

日がたけて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、どこから起つて來るのだか、大きな筒から限りもなくぬけ出して來るやうな聲で鳴きたてる鳥がゐる。始もなく、終もない。聽いてゐれば、次第に魂を吸取られて行くやうに、よるべない聲の鳥である。或時は極めて間遠に、或時は釣瓶打に激しく鳴く。

しづく（雫）

間の抜けた

ふくろふ（梟）

この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どうかして一日見たいものと、幾たびも私は木のしづくにぬれながら、林深く分入つたが、遂に見る事が出來なかつた。筒鳥といふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて間の抜けたものであるが、それを稍小さく、且人間臭くしたものに呼子鳥といふのがある。初め筒鳥の子鳥が鳴いてゐるのかとも思つたが、よく聞けば、全く違つてゐる。山鳩にも似、またふくろふにも近いが、そのいづれとも違つた、やはり呼子鳥としての、言ひがたいさびをおびた聲である。

筒鳥

橘南谿江戸時代末期の醫師、國學者。本姓は宮川春暉。伊勢の人。文化二年（一八〇五年）歿、年五十三。

道連になりぬ

行きたりしに

醫者なるが

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一齊に、其所此所の溪から峯へかけて鳴きたてる。茫然と佇んで耳を澄す私は、身體全體の痛み出すやうな感覺におそはれる事が再々あつた。

（比叡と熊野）

八　篤實

橘　南谿

余が諸國を巡りて、備後國を通りし時、百姓と見ゆる年老いたる男二人、ふと道連になりぬ。山の名、里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を著し、方頂巾を戴きたるを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにか。」と問ふ。「我は都方の醫者なるが、醫術修業の爲に

遊歷するなり
さてもたのもしき御人や
あはれ都近くもあるならばなど……歎き居り候
あはれにも候へば取らせ給ひて
彼等が心をも慰め給はらばや

諸國を遊歷するなり」と答ふれば、「さてもたのもしき御人や。我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年になれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせし。その家にもいろ〳〵と醫療盡さゞる事はなけれど、つゆばかりの驗もなく、今ははや危く見え候。かゝる山深き片田舍なれば、名高き醫師も候はず。あはれ、都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎き居り候。今日ははからずもめぐり合ひて、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の言葉も思ひ出されて、あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしか

尾道
今廣島縣尾道市。
行けども行けども
饑ゑ。
つぶやく（呟）

ば、余も「この道修業の事なれば、いと易き事なり」とうけがひて、かの者どものしりへに從ひて、尾道の二三里ばかり此方より、右の方へ分入りぬ。

鹿、狼の通ふ如き細路を、谷へ下り峯へ上りて、行けども行けども程遠きに、日影も稍傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕は腹立ちて、「程も知れぬいたづら事」とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やう〳〵に到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて、本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衞といふ。案内の者しか〴〵の由を言へば、家内皆驚き悅ぶ。「病者は去年の冬より、難治の病にかゝり候ひしが、次第

腹裂くる心地

おろかに

命の限りも遠からじ

助かるべくも思ひ候はねど

ゆかしくこそ候へ

得しめ給はゞ

に重りて、果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日日月々に病つのり、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へがたし。それ故、晝夜たゞこたつの櫓に兩手をつかへ、立ちながら俯きてをる時のみ少し心安らかなるやうなれば、春以來はかた時も坐せず、臥さず、たゞ晝夜食ふにも、眠るにも、この通りなり。その苦しみなか〳〵申すもおろかに候。近き頃は殊に惡しく候へば、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給ひて、横に臥して安らかに永眠するを得しめ給はゞ、上も

流せるさま

生きたる人

三原の城下　今廣島縣御調郡三原町。淺野氏の舊城下。

なき御惠。と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちて俯きをれば、足は柱の如く腫氣ありて、顏もまた眼ぶち腫れ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり一しきり腹張り來る時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體はまことにかくの如く危けれど、その脈に見どころありければ、急ぎ藥を與へ、なほ藥湯をもて腰より下を漬し、種々の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横ざまに臥す事を得たり。なほしな〳〵の療治を加へ、この以後に用ふべき藥方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山を分出でて、三原の城下に著きぬ。

誠ありたればこそ……ならめ

し給ふべからず

つゝが（恙）

六條　今京都市下京區。

三原にてこの物語をせしに、「さても危き事なりき。御心に誠ありたればこそ佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給ふならめ。かくの如き事は、多くは盜賊の詐る事にて、旅する人を人なき深山に連行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず。」と言ひけるにぞ、始めて心附きて、つゝがなかりし事を喜びき。

それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや。」と問ふ。「いかなる用ぞ。」と聞けば、「備後國より六兵衞といふ百姓一人上り來り候ひて『下に市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。

見覺えたり

見當て候へば

言へば

去々年しか〳〵の事にて高恩を受けたれば、御禮の爲に來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市の字ありしを見覺えたり。』と申す。手がゝりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、まづ表札を見巡りて、市の字を見當て候へば、お尋ね申すなり。」と言ふにぞ、「その事あり。」と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日、かの六兵衞、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて禮物とし、「さても過ぎし年は不思議の御緣にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、再び常體の人となり候ひぬ。近所の者の行きあひより始り

御名さへ承らず候
逢ひ奉るべしとは
はからず候へども

候。うて

いかで尋ね來べき

て、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとははからず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さゞる心のうちも安からず。若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺へにても參り候うて、弘法大師様へ御禮申して歸るべしと存じ極めて參り候ひしなり。まづは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候」とて、眞實顏色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰めて、歸し遣りぬ。

都近くの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるゞ尋ね來べき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにもなほ餘りあり。

（西遊記）

柳澤淇園
江戸時代中期の儒者。大和郡山藩の重臣。名は里恭。寶曆八年（一七五八）歿、年五十三。

ほめ給へば
思ひ過しゝが

九　親の慈愛

柳澤淇園

一　親の慈愛

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、偶〻作文などせしをりから、稿なりて父に見するに、一つとしてほめられたる事なく、たゞ「無益の事なり」とて座右に投捨て置かれ、他の者のは見てほめ給へば、さりとてはいかゞとのみ思ひ過しゝが、後に妻に迎へたる女の、もの縫ふ事の人にすぐれて、小袖など一日に一襲づつ縫ひて、餘事までも事缺かねば、もの縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。余或時もの縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の言ふ「三歳にして母

子ならねば
羽根つく遊だにえせで……
遑なかりつれば

に後れ、繼母に育てられしが、いと嚴しき性質にて、五六歳より水仕の業をつとめ、七歳より手習、物讀、裁縫を敎へられ、『實の子ならねば、敎訓足らじと末に至りてそしられんは口惜し。』とて、羽根つく遊だにえせで、たゞもの縫ふ事などのみに遑なかりつれば、をりからははげしき母よと思ひしかども、今となりてはもの縫ふ事を人にほめらるゝは、ひとへに繼母のなさけ薄からざる慈愛なり。』と言へるを聞きて、余がいとけなき頃の作文をほめられざりし事の、いとありがたきを思ひ合せぬ。

二　朝顔

朝顔を植ゑたる日より芽ざすを待つは、子を育つる親の

思ひ知らる
たのめて
道にまどへる者
繪にも巧めるものをや
露を含みたるが……
しづくももらさじ
る……

心もかくやとばかり思ひ知らる。二葉よりいや葉生ひ出で、いと細やかなる蔓のかきほに取著くさまは、いはけなき兒のものをたのめて立ち初むるに似たり。蔓稍肥え、葉いよゝ茂りて、この蔓かの蔓にそひ、かの蔓この蔓を卷きて、爭ふが如く、競ふが如きは、道にまどへる者を案内するさまあり。或は登らんとする者の手をとりて引上ぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。花はその日〳〵に色變へて、おのがじしに染めなして、夙に起くるを勸むるに異ならず。東雲の今日明けゆく程、露を含みたるがそよ吹く風にもまれて、重げに置きあへずふりこぼせば、此方の花の、その露を受けてしづくももらさゞる、すべて君臣相いつくしみ、父子相憐み、夫婦相

睦び、兄弟相助け、朋友相親しむにひとし。人の世にあるもこの花の如く、その日〳〵を營みなば、盛りもいと長く久しからめと、まだきに起出で、東雲の曙をなぐさみ侍りぬ。

營みなば
なぐさみ侍りぬ

三　世渡る業

木曾の山中など深山幽谷にて岩茸を採るには、ふごといふ物を造りて、綱を附けて、夫はそれに入りて、その妻樹々の枝より下げて、釣りおろし引上げなどして谷間をあさるとぞ。下は幾丈とも限り知れざる所なる由、見し人物語れり。若し過ちて綱の切れて落ちたらんには、命なかるべし。また伊勢の海にて海士のあはび採るには、乳呑兒なんど引連れて、夫はかいを使ひゐて舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此

ふご（畚）
……とぞ
過ちて……落ちたらんには命なかるべし

所彼所貝をもとむるうちに、兒の乳を尋ねてよゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の聞ゆるにひかされ、浮び出でて舟べりに取附き、息もつきあへず兒に乳を添ふる有樣、あはれにして實に惻隱の心も起りぬべし。

得まく思へど
起りぬべし

世渡る業さま〴〵なる中に、かゝるすぎはひするやからもあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いとありがたき事にあらずや。

あるものを
過しつる身

四　土器賣る翁

伏見より年七十歳ばかりなる老翁、土偶人、土器のたぐひを擔ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に來りて食事

伏見
今京都市伏見區。
賣りありくあり

をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁に言ひけるは、「御身の擔ひたるものは、その價いか程ばかりの品にか。」と問へば、翁答へて、「銀十五六匁程の荷なるべし。」と言ふ。また問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかゞする。」と言へば「それこそ過なれば、さる事なしとは言ふべからず。さあらん時はその事をありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」と言ふ。また問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかゞする。」となじり言へば、「いかに問屋なりとて、數度の無心も言ひがたければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりともいたすより外にせんかたなし。」と言へり。

（雲萍雜志）

…荷なるべし
過ちて碎くまじきものにもあらず
言ふべからず
商ふなれば
言ひがたければ
奉公なりとも

一〇　幸福

栗原古城

私たちの生活が幸福であるか不幸であるかといふ事に就いては、外界の事情よりも、私たち自身の心の持ち方であるといふ事は、古來幾多の賢人の說いてゐるところでありますが、この事は、餘程心を靜め氣を落著けて、外部の喧噪から遠ざかり、孤獨になつて沈思してみないと、わからない事であります。それで、若い世馴れない人たちは、ともすれば、何か積極的の仕合といふものが、華やかな衣裳を著け、賑やか

栗原古城　著述家、飜譯家。名は元吉。明治十五年埼玉縣に生れた。
…事は…ところであります
この事は…事であります
若い世馴れない人たちは…考へてゐるやうであります

な音樂を先立てて、堂々と表面から乘りこんでても來るか、或はまた、自分が非常な苦しみをしたり、無理な危險を冒したりして、これを探し求めなければ、得られないもののやうに考へてゐるやうでありますけれども、それは大變な間違でして、幸福は私たちの氣附かぬうちに、裏口からこつそりとはいつて來て、私たちの足許に默つて坐つてゐるのです。ですから、私たちの方でこれに氣附かなければ、彼は何時まで經つても、先方から聲をかけて、私たちに名のりをかけたり、呼びかけたりする事はないのであります。

間違でして

彼は……呼びかけたりする

これに反して、幸福の反對である不幸といふものは、美しい彩雲を浮ばせたり、虹の橋を架けたり、若しくは華やかな

不幸といふものは……誘惑するか……乘りこんで來るものであります

粧をして、笛、太鼓の賑やかな音色で私たちを誘惑するか、さもなくば、恐しい騷を先立てて、堂々と强制的に玄關から乘りこんで來るものであります。それで、私たちが一度その捕虜となつてしまふと、たとひどんなにそれが小さな事であらうとも、その苦痛は私たちの心の全體を占領して、今まで自分の占め得た幸福は、まるで帳消にされてしまふものであります。極めてわかり易い適切な例を申しますと、私たちは健康といふ何ものにも換へがたい大きな幸福をもつてゐますが、この無上の幸福の狀態は何かと申せば、それは苦痛がないといふ事だけにとゞまり、幸福の中に包まれてゐる人間は、自分自らはその幸福を意識せず、健康そのものも

幸福は……ものであります

私たちは……悟るのです

自分の心が……ざわついてゐたりする等の

「自分はお前に幸福をもたらして來たのだぞ」とは言つてくれません。それで私たちは病氣にかゝつて健康を失つた時に、始めて過去を振返つて、健康の貴い事を悟るのです。

ところが、病氣はどうでせう。この方はすぐに私たちの意識を囚へて、その苦痛に執著させます。彼はなか〳〵執拗で、決して私たちを自由にしてはくれません。それでさん〳〵私たちを責めさいなみますから、若しも私たちの意志が弱いと、そのちよつとした不幸や苦痛の爲に、從來私たちの所有してゐた全部の幸福までも自分から投出してしまつて、進んで沒落の淵に身を投ずるやうな事になります。

ところが、私たちは實際どうかと申しますと、自分の心が

粧うて

人物は……人たちで

頑固であつたり、不從順であつたり、または遠くの方ばかり見詰めてゐたり、驚き易くざわついてゐたりする等の事情から、心の眼がまるで盲目になつてゐる爲に、苦痛の假面を粧うて來る快樂を取逃したり、眼前に坐つてゐる幸福を少しもそれと氣附かずに、不幸や禍の跡のみを追駈けてゐたりして、普通に行けば樂に行ける一生を、わざ〳〵苦しみ通しに終る事が多いのです。

小説や戲曲の中に現れる人物は、多くはこのやうな、心の眼のあいてゐない憐れな人たちで、彼等は思ひ過しをしたり、心配をし過ぎたり、餘計な盲動をしたりして、わざ〳〵苦痛や艱難の中に陷り、もう取返しのつかぬといふ瀬戸際に

ところは……出ないのであります

閉ぢられて

この事は……點で

なつて、周章狼狽するやうでありますが、これ等の事がらには、多少の誇大はあるとしても、私たちの日常やつてゐるところは、大抵皆この範圍を出ないのであります。殊に近代文明といふものは、私たちの外界を濫りに賑はしく、騷がしく、複雑にするので、私たちはやたらに欲望を刺戟されるだけで、心はいやが上にも動搖して、とても沈思したり、反省したりする餘裕がなくなつて、心の眼は漸次閉ぢられて行くばかりであります。この事は、近代文明の一番恐しい點で、私たちが始終注意して、警戒してゐないと、とんでもない間違つた議論や、學説や、禍などが、新しい華やかな假面を被つて、誘惑しに來るものであります。

私たちは……苦しみぬくのです

ですから、この世の中には、誠意から生じた間違といふものが數限りなく充滿してゐて、心の盲目な私たちは、何時もその捕虜となつては苦しみぬくのです。私たちが自分から善い事と信じ、確かに眞理だと思つてした事が、神の眼から見て恐しい惡事であつたり、間違だらけな事であつたりするのは、殆ど日常の事だと申して差支ありません。けれども、かういふ不幸を味はつてこそ、幸福も始めてその眞の輝を放つので、さもない時には、人は幸福をたゞ一通りの尋常な事として、一向感謝する事もなく、大部分は無意識のうちに過してしまふ事でせう。

要するに、私たちの生命が宿つてゐるこの人生といふも

幸福といふものも……過ぎぬ

恐しいのは……迫駈ける事です

のが、消極と積極とのかね合ひで出來てをり、二つの相反對した力の調和の上に私たちの肉體も保つて行けるのであり、私たちの幸福といふものも、畢竟はその適度な快い調和に過ぎぬといふ事を知つてゐないと、とんでもない不幸の渦中に卷きこまれるのであります。分けて恐しいのは、實際ありもせぬ空想の彩雲に惑はされて、現在の苦痛のない境涯を捨てて、新奇なものの跡を追駈ける事です。

現在の世態は益〻この危險の前に若い人たちを暴露するやうになつて來ました。これによく氣を附けねばなりません。

野口英世醫學博士、理學博士、ドクトル・オブ・サイエンス。ロックフェラー醫學研究所部長。福島縣の人。昭和三年歿、年五十三。

ロックフェラー Rockfeller

我がロックフェラー研究所は……痛惜する

野口英世博士が……倒れた

アクラ Accra 英領黃金海岸に面する小邑。

イブニング・ポースト Evening Post

一一　偉人野口英世

「細菌學者野口英世の死によつて、我がロックフェラー研究所は、その最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最も敬愛されてゐる共働者の一人を失つた事を、世界のすべての人々と共に痛惜する。」

世界の醫聖と謳はれ、全人類の慈父と仰がれた野口英世博士が、西アフリカ、アクラの海岸に恐るべき黃熱病研究の犧牲となつて倒れた翌日、博士が籍を置いたロックフェラー研究所は、世界の學界に向つて以上の如き聲明書を發表した。

アメリカのイブニング・ポースト紙は

「博士は日本に生れたとは言へ、その功績よりすれば全人

類のものである。博士の勇ましい獻身的生涯は、現代の範とするに足る。まことに博士の抱いてゐた理想は、自分を犧牲にして濟世の道を歩んだ聖者のそれの如きものである。」

聖者のそれ

と、その長逝を哀惜した。

傳ふべきものである

まことに博士野口英世は、日本を鄕國とする世界人であつた。國境を越え、人種を超えて研究貢獻した博士の卓越した學勳は、千載永く傳ふべきものである。

博士は病理細菌學の專攻學徒として、その研究の範圍は殆ど全世界に亙る廣汎なもので、研究發見の報告は實に百七十五篇の多きに上り、その多くは不滅の文獻として、全學

ロックフェラー研究所は……もので……觀がある

ロックフェラー John Davison Rockfeller 西紀一八三九年ニューヨークに生れた。一九二七年巨額の基金を投じて、人類の幸福增進を目的とするロックフェラー財團を興した。

フレキシナー Simon Flexner ドクトル・オブ・メディシン。ロックフェラー醫學研究所長、米國學術會議委員長。西紀一八六三年――なぞ（謎）

界の至寶となつた。

博士が終生の研究道場としたロックフェラー研究所は、アメリカの富豪ロックフェラー氏の美擧によつて設立されたもので、現代科學界に雄飛する醫學の王國の觀がある。此所に集められた醫學者は、悉く各國の醫學界に萬丈の氣を吐く權威である。野口英世博士は恩師フレキシナー博士に選ばれて、その創成の業を輔けたたとひフレキシナー博士にその異常の天才を早くも認められたとは言へ、また學界多年のなぞであつた蛇毒の研

野口英世

かち（贏）
努力は……至つた
研究發見の跡は……語り盡し得ない

究にアメリカの科學界を驚歎させたとは言へ、異邦白面の一醫學者が、かうした所に乘出して來た事その事は、アメリカ醫學關係者の驚異の的であつたに違ない。時に博士はなほ二十八歳の弱齢であつた。爾來二十餘年、博士の鏤骨彫身の努力は、醫學者としてのあらゆる最高の名譽をかち得るに至つたが、到底人間業とも思へぬ程の驚くべき精力と、智力と、根氣とをこめたその廣汎深遠な研究發見の跡は、いかなるこの世の讃辭を以てしても語り盡し得ない。

フランスの一新聞紙は博士を讃へて、「日本の生んだ近代の驚異」と言つた。事實、超人間的の偉大なその業績は、博士の生涯を飾つて永遠に輝く。それと共に、日本人が學術的に世

事は……立證された
生んだのは……國土である
……ものは……研究所であつた

界を壓倒し得る事は、博士によつて明らかに立證された。科學にとかく冷淡な傾のある日本人の中に、はからずも博士のやうな偉人が出現したのである。されど博士を生んだのは日本の國土であるが、彼を磨き彼を鍛へて、限りない光榮を人類の上に享けしめたものは、實にロックフェラー研究所であつた。これを思ふ時、科學の尊重を高唱する心がとみに湧き、科學者に對する敬意をたかむべき必要を痛感するのである。

博士は地球を墳墓として冷徹明澄の理性を深め、苦闘精進した科學の使徒であつた。しかもその餘影には、聞くもゆかしい數々の挿話がある。博士は生涯日本人である事を誇

つた。そして故國をしのび、鄕黨を思ひ、殊に骨肉を慕つた。日本を出でて十六年、繁劇な公務に縛せられ、勃々たる研究心に驅られて、日本學界の幾たびかの招聘、先輩知友からの切なる慫慂にも應ずる事が出來ず、遂に歸朝の機會を捉へ得なかつた博士は、一たび故國から送られた一片の年老けた母堂の小影に接するや、倉皇として歸來し、故山に母堂の健在を喜んだ。博士はまた舊恩の人に絕大の敬意と感謝とを常に捧げた。その少年の頃、學僕となつて恩寵を受けた舊師に對しても、既に學界の高き權貴に立つ博士は、なほ生涯昔ながらの呼捨を以て呼ばれる事を求め願つたといふ。或は母校猪苗代高等小學校以來、薫陶後援到らざるところなか

博士は……歸來し……喜んだ

猪苗代　福島縣耶麻郡猪苗代町。

つた良師に對しては、「自分は若しかの人に見出されなかつたら、牛追太郎で一生を終つたであらう」と、終生その恩に感謝したといふ。これ等は共にその人格の麗しさと清らかさとをおのづから感じさせる話柄ではないか。

やしの森繁る南米エクアドルのギャヤキル市に立つ青銅の標面に、

「一千九百十八年七月二十四日、ロックフェラー研究所のメン

……たら……であらう

エクアドル　Ecuador　南アメリカ西北部の共和國。

ギャヤキル　Guayaquil

メンバー　member

野口英世の生家

半ばにして

生地は……一寒村である

バー、ヒデヨ・ノグチ――日本の細菌學泰斗――黄熱病の原因を此所に始めて見出す」。

とある。先驅の勇者は業半ばにして悉く倒れたが、南アメリカ大陸百千年の繁榮の途は、かくして開かれた。けれども同じ熱帶の西アフリカに、更に兇惡な黄熱病が猖獗を極める事を知つた時、博士野口英世は敢然としてこれが征服を志し、傷ましくも天職に殉じた。人道の父はかくして人類愛の前に、悲壯な犧牲となつたのである。

偉人野口英世。その生地は福島縣耶麻郡翁島村といふ猪苗代湖畔の一寒村である。

故郷の停車場　磐越西線翁島驛。

プラットフォーム　platform

母名はシカ。

單純な動機　簡單な原因。

自修文

母を故國に省みて

野口英世

汽車が故郷の停車場へ近附くにつれて、私の心は躍つた。思へば十五年の歳月、親しむ事の出來なかつた懐かしい山や、川や、森や、停車場前の湖や――私は幾たびか延上り〳〵して、車窓から遙かに小さなプラットフォームへと眼を放つた。其所には數多くの出迎へ人に擁せられて、私の母もゐた。

母。この母あればこそ、私はかうして十六年ぶりに再び故國の土を踏んだのである。懐かしい母、世にも尊い母、自分を生み、育て、いつくしみ、今の位置に上せてくれた母――その母の顔を一眼見たさの單純な動機から、私はかうして歸つて來た。

福島縣耶麻郡翁島村――其所が私の生れ故郷である。祖先の墓のある土地である。私の最初の、而して唯一の教育を受けた小

薄倖　ふしあはせ。
幻覺　まぼろし。
剛膽　心のしつかりしてゐること。

學校の所在地である。或時は身の薄倖に泣き、或時は發奮の志を立て、幾たびか人知れぬ涙をしぼつた故郷なのである。昔ながらの岡、森、湖水、それが今や、一種幻覺の中の光景のやうに、私の眼には異樣に映じて來る。不思議とも、奇妙とも、名附けやうのない感想がひし〳〵と身を襲つて來る。三十年前の自分の姿が全く別人のやうに浮んで消えた。

「あゝ、おれはかういふ土地から出て行つたのかなあ」。

私は覺えずつぶやくのであつた。浦島の子が故郷へ戻つた時の驚異程ではなくとも、私は自分の眼、自分の耳をいぶかしまずにはをられなかつた。

母はさすがに氣丈夫であつた。或日本の新聞では、私と母が相擁して泣いたと書いたさうだが、それは全く嘘であつた。泣くどころか、母は涙一滴眼に浮べなかつた。私は今更に母の剛膽に驚

須臾も胸を云々　ちよつとの間も忘れなかつた。

かされた。その氣象に勵まされた。

「とてもこの世では會へないと思つた——」。

かう言つて、しかし母は飛立つばかりに喜んではをられた。村の歡待、若松市での醫會、市會、教育會、それから學校の方々の手厚い歡迎を受けた中にも、私は鄕里に於ける恩人——小林榮、渡邊鼎氏の事は須臾も胸を離れなかつた。船が横濱に入つた時も、その方々はわざ〳〵横濱まで出迎へに來て下さつた。甲板の上から眼鏡でその恩人たちの顏を認めた時、歡びの血潮は私の全身に湧いたのであつた。

野口英世と母のそと

しかしながら、私が現在に至る種を蒔いてくれたのは、やはり母であつた。私が何物をか持つてゐるとするならば、その芽を枯

邪氣なき嘲笑
惡氣のないあざけり。

らさずにつちかひ養つてくれたのは、やはり母であつた。母は實に氣丈夫な勇氣のある人である。

私の生家は貧しかつた。小學校へ通つてゐる頃も、家に戻るとすぐ私は母を助けて種々の仕事を手傳つた。殊に私は稚い時分、ふとした過失で手の指に火傷を負つた。指と指とが抱合してゐて、取分けその點で學校朋輩にも嘲けられた。自分で言ふのはをかしいが、學校での成績は良かつた。しかし、友達の邪氣なき嘲笑は、身にしみ〴〵と辛く覺えた。

かゝる間も、母は深く私の身の上を氣遣つてくれた。學校でも良い教師へ賴んで、何かと勉學の便宜をはかつてくれた。

小學校を出ると、私はすぐと猪苗代小學校の助教員になつた。俸給も月三圓かそこらであつた。家の生計も貧しかつたが、母は私の給料に手を著けるやうな事はなかつた。私は給料を丹念に

ドクトル
doctor

天の福音
天からの幸なしらせ。

貯へて日本外史を買つて讀んだりした。その時は母も驚き、且共共に喜んでくれたのを覺えてゐる。猪苗代の小學校長は卽ち小林榮氏で、私は後々もこの人に取立てられたのである。

或日、私は若松にドクトル渡邊鼎氏の門を叩いた。いかにもして手指の切開を行つてもらはうとした。渡邊氏は私の手を診察すると、

「なあに、手術さへすればすぐ治るよ」。

と言はれた。この一語、私は天の福音として聞いた。而も手術の結果は果して良好で、從來は物もつかむ事が出來なかつたのが、りつぱに役立つやうになつた。私は歡喜にふるへた。希望の光明は瞬間に私の胸を明るくした。

「よし、おれも一つ醫者になつて見せる」。

私は身慄ひしてつぶやくのであつた。その時、私は十六歳であ

藥局生　醫者に雇はれて藥の調合をする人。

血脇氏　血脇守之助。東京齒科醫學專門學校の設立者、校長。當時は高山齒科醫學校の幹事。

義俠　自分の名譽、利益を顧みずに、人の爲に盡すこと。

一介の田舍書生　つまらぬ一個の田舍學生。

つた。

それから私は渡邊氏の藥局生として、夜の目も寢ずに醫學の研究にかゝつた。傍ら語學の勉强を始めて、英、佛、獨の各國語を殆ど獨學で習得した。かやうにして私は渡邊氏に二箇年身を寄せてゐた。この間の渡邊氏の親切、小林氏の指導を忘れる事は出來ない。

私が愈〻東京へ出る決心をうち明けた時は、小林校長も、渡邊ドクトルも、翁島の母親も、心から贊成してくれた。渡邊氏は知人血脇氏に宛てゝ紹介狀を認めてくれた。同級生の誰彼も寄附金を募つてくれた。小林氏も身に不相應な餞別を祝つてくれた。

かくて私は故鄉の山河を後にして、明治二十九年四月、始めて花咲く都の土を踏んだ。血脇氏は義俠に富んだ人で、渡邊氏の紹介狀を懷にしたこの一介の田舍書生を、快く引受けて玄關番に

順天堂醫院　東京市本鄉區お茶水にある。

傳染病研究所　東京市目黑區にある。

海港檢疫官　傳染病の豫防の爲に海外から來た船に對して、病菌の有無を檢する役。

してくれた。爾後、私は血脇氏の指導の下に研究の歩を進めて、その年の十月には、前期の免狀を得、翌年十一月には後期の試驗に及第した。それが學術と實地と一度に及第したのであつた。續いて血脇氏の口添で順天堂醫院の助手となり、更に傳染病研究所へ入つたのは明治三十一年の五月であつた。翌年には海港檢疫官補として横濱檢疫所へ行つた。支那に渡つたのはその十一月で、八九箇月滯在して愈〻三十三年十二月、渡米の途に就いた。渡航費に就いても、血脇氏に一方ならぬ世話になつた。

海港檢疫官補時代の野口英世

廣い自由な希望に滿ちた世界。そのアメリカ大陸に渡つて、私

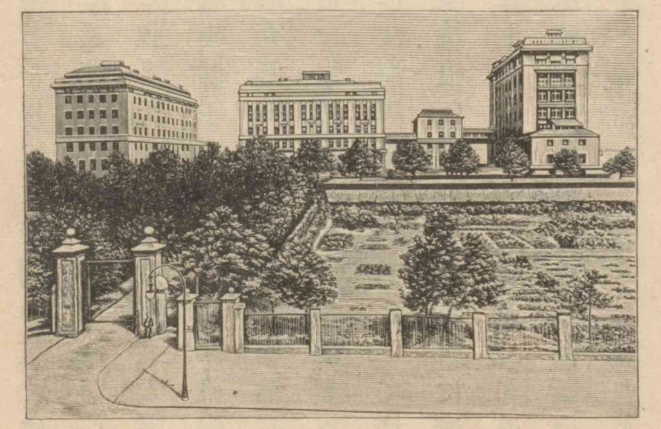
ペンシルバニヤ大學　Pennsylvania　アメリカのフィラデルフィヤにある綜合大學。

端なくも　思ひがけなく。

肝煎　骨折。

カーネギー　Carnegie

はまづペンシルバニヤ大學へ行つた。其所の圖書館に入つて二三箇月を一心不亂に讀書した。やがて一つの論文を書いて見た。それが端なくも大學教授たちの認むるところとなつて、同大學の病理學教室の助手となる事が出來た。偶〻ロックフェラー研究所長フレキシナー博士の肝煎で蛇毒の研究を以てカーネギー研究所に入り、英、獨、佛三國を經て歸米後、三十七年愈〻ロックフェラー研究所に入所し、七人しかないメンバーの一人に推された。爾後今日まで其所の仕事に從ひ、自分の研究を續けてゐるのである。



ロックフェラー醫學研究所

觀念する　あきらめる。

世間の人はよく言ふ。

「野口は海外に渡つてから非常に苦心をして、今日の位置と名譽を得たのである。」

と。しかしながら、私は決して格段の苦心も努力もした覺えはない。私はたゞ樂しんで學んだのみで今日あるを得たのである。

「あの時はさぞ苦しかつたらう。」

「さぞ辛かつたらう。」

などとよく人が言ふ。成程著る物がなくて、人の集る席へも出られなかつた事がある。食ふに困つた事もある。しかし、私は心から「辛い」と思つた事はない。何時も自分の位置と境遇とに於ける正當の仕事をして來た。

「今度こそ最後のどんづまりだ。」

と觀念しかける時に、何時も義俠な人が現れたり、または境遇が

ひらけたりして、行手に榮ある光明を望む事が出來たのである。

世間を見ると、自分の位置に適應するやうにと、働く人がある。待遇が惡いからと言つて最善を盡さぬ者がある。しかし、私はそれと反對だ。番頭ならば番頭としての自分の職責を果すべく、官吏なら官吏として自己の良心にやましからぬ勤勞をなすべく、學生ならば學生としての本務をあくまでも盡さねばならない。これ等は我が日本の學生諸君が、くれ〴〵も今から心がけて置かねばならぬところであらう。

一二　樂地

幸田露伴

幸田露伴　小說家、文學博士。名は成行。慶應三年（一八六七）江戸に生れた。

樂しき地はあるべし

いかなる所にも樂しき地はあるべし。またいかなる所にも樂しからぬ地あるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天のどかに霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、快き事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕べの風には寒さに怯ゆる事もある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎えかゞむ冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に淸き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を湧し、ぬく灰はたく燒芋の暖かきに笑むをか

幸田露伴

滿つべくはあらず

怯ゆる

あるべく

樂しむべきところもあるべきなり

見出さん事

身につくる

しさもあるべし。金殿玉樓にも樂しからぬをりはあるべく、茅居草屋にも樂しきところはあるべし。事物は大凡たゞ一向ならぬものなれば、いと〳〵樂しからぬがうちにも樂しきところ、樂しむべきところもあるべきなり。

樂しきところ、樂しむべきところを見出し得れば、いか程窮苦不快のうちにありても、人はおのづからに勇氣を得て、苦中の苦に耐へ忍び、やがて人上の人となり得る事もあるべし。さなきまでも、樂しからぬがうちに樂しき地を見出さん事を常に心がけて、その習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も闊く、氣も豐かになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。

……習慣を身に賦せんと心がくべし

碓氷　群馬縣の西南方長野縣の境にある峠。海拔九五八メートル。

重かりければ

江州のならぬ商人

碓氷の山の今少し低くもあれかし

……としも思ふなり

努めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

昔、或江州の行商人と他の國の行商人と、共に碓氷の坂路を上り行きけるをり、夏の日の烘るが如く熱きに、商ふ品の嵩高に重かりければ、二人共憊れ苦しみて憩ひけるが、苦しさの餘りに、江州のならぬ商人、「碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり高く峻しくては、行商を廢めて、歸り去らんとしも思ふなり」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人うち笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむ程は我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども我はしか思はず。この碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば數

多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて歸り去るべし。その時、我一人いかにもして山のかなたに到り、思ふがままに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ」と言ひけりとぞ。

碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ……とぞ

同じ苦難のうちにありても、よく樂地を觀る者は身撓んで心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よく〳〵思ひ味はふべきなり。

味はふべきなり

（洗心錄）

一三　子羊の群

福田正夫

福田正夫　詩人。明治二十六年神奈川縣に生れた。

草を食み、
草を食み、
高原を歩む子羊の群。

赤き雲、暗綠の山、
夕暮の空の下に、
しづかなるやはらかき畫。

刈られし毛の貴人（あてびと）の衣となるとも、
子羊はやさしき眼をみはり、
やせたる牧夫の心のまにまに、

草を食み、
草を食み、
夕暮の高原を群をなして歩む。

那珂通高　江戸時代末期の儒者。號は梧樓。陸中の人。醫を以て盛岡藩に仕へ、尊王論を唱へて活躍した。明治十二年（一五三九年）歿、年五十三。

古河　茨城縣猿島郡。

思ひ出でたれば　見せまゐらせん

石部、水口　共に滋賀縣甲賀郡。東海道五十三次のうち。

藤房　藤原藤房。吉野朝の忠臣。

見たりしかば　ゆかしさに

一四　繪畫の感化

那珂通高

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人、二十年ばかりの昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書綴りて人々に見せまゐらせん。

茂足少き時東海道より京に上る。近江の石部と水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見たりしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、其所に卿の念じ給ひしといふ觀音を安置せり。

その御佛の御前に、我より先に旅商人と思しき五十餘歳

問ふべくもあらねば　頃しも

休み給はずや

おはしますにや　歎せしをや見給ひけん　いかで……べき　今日しも

の男入り來りて、何事を歎くにか、さめ〴〵と泣きゐたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りてもとの驛路に出でぬ。頃しも如月の初なりければ、日影暖かなる所を見出でて憩ひゐたるに、かの男も出で來ぬ。茂足は「日影も暖かなり、ちと休み給はずや」と言ふに、かの男會釋して、同じ所に腰うちかけたり。しばし四方山の物語して、さて後に「先には觀音寺にて見かけまゐらせしが、かの卿に深き御所縁などおはしますにや」と問ふに、いと恥ぢらひたる氣色にて「さては世に似ぬ歎せしをや見給ひけん。賤しき身の、いかでやんごとなき御方に所縁などいふ事の候べき。但し、今日しもふと思ひ出でし事ありて、涙せきあへざりけるを、恥づかし

語り聞えん

高麗橋 今大阪市東區。

家繼がすべくもあらぬさま

東金 千葉縣山武郡。

其所守る人に頼みてん……

世にまさねば

行きてよ

くも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅しに、途すがら語り聞えん」とて、諸共に立出でぬ。

この男は津の國大阪の人にて、稚かりし時に父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬさまなりしかば、父は怒りて勘當しけれども、母刀自は一人の男子故、さすがにいとほしがりき。上總の東金に出店あれば、竊かに其所守る人に頼みてんと思ひ寄りしかど、はる〳〵の旅路を一人遣らんも心もとなくて、この男召出でて「お事は御兩親共に世にまさねば、いづこに住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし、暫時が程我が子に具して上總の方に行

蕨 埼玉縣北足立郡。

殘すくなになりにけり

かたからじ

行きたらんには

歸らるまじ

きてよ」とて、金二十兩程預けられたり。さてその子と共に大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、夜ごとに酒を廢めざれば、中山道の蕨驛に來りし頃には、その金も殘すくなになりにけり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事もかたからじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝるたのもしげなき人に具して出店へ行きたらんには、たとひ母刀自の書ありとも、同じむれのえせ者とや思はれん。よし、さは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は、大阪にも歸らるまじ。とにもかくにも、よしなき人に伴なひて遙かに來りけりと、悔しさ限りなかりしが、また思ふやう、身を立てよすが求めん

江戸にまさる所やはある
……ばや
知りなば
すべかりしを後れにけり
こを盗みて賣りしろなさんには

には、江戸にまさる所やはある。此所まで來しこそ幸なれ、今宵のうちにこの人を捨てて歸らばやと思ひ寄りしかど、暫時の程も貯なくてはいかゞはせん。かくと知りなば、預りし金あるうちに、とにもかくにもすべかりしを、後れにけりとまた更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、百兩餘のつひえもて作りたるものなる事を思ひ出でて、よし〳〵、こを盗みて賣りしろなさんには、十日、二十日の日を送るにかたき事はよもあらじと、心一つに謀りすまして、さらぬさまにもてなしつゝ、今宵限りの旅寢なればなど言ひこしらへて、酒勸めて寢させぬ。

夜更けて後にそと起出で、枕邊に忍び寄りてうかゞへば、

時とそよけれ
ふすま（襖）
人や來る
笠置　京都府相樂郡。木津川の南岸。
寢させ奉りし形をなん……ける
あなあさまし
……だに

立てまはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよけれと、徐に屏風に手をかけて引きあくるに、内より行燈の火影のさとさし出でて、後のふすま障子に映りたるを、人や來ると驚きて顧みれば、今まで見も入れざりしそのふすまに、藤房卿の笠置より後醍醐天皇のお供して大和の方へ落ち給ふ時、松蔭に袖敷きて、その上に帝を寢させ奉りし形をなん描きたりける。この男これを見て、あなあさまし、やんごとなき御方だに、君の御爲にはかゝる習はぬ憂き目をも見給ふものを、

松の下露（關來觀筆）

思ひなりにけん
寢ねたる人
なりにたれど
詣でぬれど
御姿を見まゐらせずば

いかなれば我は主の物盗まんとまで思ひなりにけんと、悔しくも口惜しく覺えて、寢ねたる人の枕邊に額づき、繰返してその過をうちわびたりき。

かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思ひ出でて、六年、七年過ぎたりしに、その人の心改り、家に歸りて父の跡を繼ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられたり。それより次第に仕合よくて、今は家業も子に任せて、あかぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみをらんも後めたさに、をり〳〵はこゝらあたりまで物あきなひに參るなり。されば何時とてもこの寺には詣でぬれど、今日しもふと思ひ出でければ、若しそのをりしもこの卿の御姿を見まゐらせずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、忝さに涙はふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。我は賤しき生れながら、若き時より軍物語の書讀む事を好みければ、その時しもこの事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ。よりて子供等にものの讀む事は常に嚴しくおきて侍りと語りぬとぞ。茂足はその頃四十歳ばかりの人なりき。

（洋々社談）

おきて（掟）
おきて侍り
東慶禪寺
臨濟宗。今は圓覺寺に屬する。

一五　同情

弱者たる女子に同情した著しい例は、鎌倉松が岡の東慶禪寺に於て見る事が出來る。寺はもと僧寺であつたのを、賴朝の叔母が尼となつて此所に住し、それから尼寺となつた。

北條時宗　北條氏第六代の執權。
北條貞時　同第七代の執權。
鎌倉殿　北條貞時。
女の事にて候へば
これある事
緣切り候うて
相願ひ候
救はう。

中興の祖は北條時宗の夫人で、卽ち北條貞時の母である。覺山といふのがこの人で、

鎌倉殿に覺山願ひ候は、出家の身ながら女の事にて候へば、利益の種も御座なく、それに就き、女と申すものは、不法の夫にも身を任せ候事尋常に候へども、女の狹き心にては、ふと邪の思立にて、自殺など致し候者これある事に候間、三箇年のうち當寺に相抱へ、何卒緣切り候うて身輕に成し候寺法相願ひ候由、これにより貞時より天聽を經られ、その意に任せられ候。

と寺記にある通り、夫に虐待された婦人を救はうといふのが本願である。それより五世の用堂尊尼は後醍醐天皇の女、

弱者たる女子
夫と不和に……といふやうなふらちな者
ふらち（不埒）

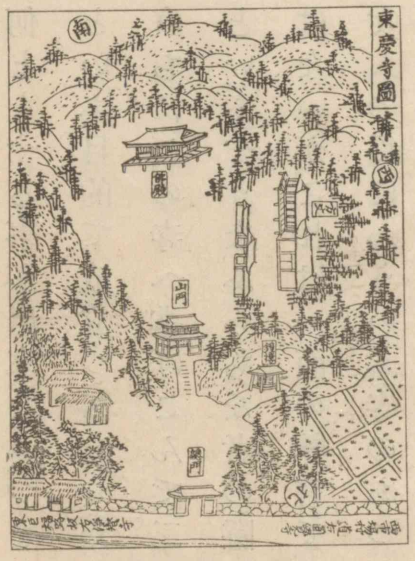
第二十世の天秀禪尼は豐臣秀賴の女で、卽ち德川秀忠の孫であつた。この寺は男子禁制で、女が逃げて此所にはいれば、何ともする事が出來ない。つまり弱者たる女子を保護するといふ目的で成立つてをつたのである。夫と不和になつて直ちにこの寺へ逃げこんで、二三年經つてまた他へ緣附くといふやうな、ふらちな者の隱場所となつた惡例もないではないが、これは一面の弊害で、止むを得ない。たよりのない女人の爲にかういふ寺のあつたといふ事が、いかにも面白く思はれるのである。

くやしくば尋ね來て見よ松が岡

など川柳に歌つたのは、卽ちこの寺である。

針の折れたのを

女子には特に同情が大切である。雛祭には人形をいたはる意味もある。二月八日及び十二月八日の兩日には、女子の針供養といふ事をする。針の折れたのを集めて、淡島の社に納め、一日絲針の業を休むのである。裁縫の業は女子の平生の仕事であるから、毎日々々使用した針に對して、感謝の意を表する心持だらうと思ふ。かういふ無生物に對しての供養は、まことに優しい心がけである。



東　慶　寺
（貞享版新編鎌倉志所載）

如月や云々　下總の俳人長翠の句。

一日として

對しなければならぬ

摩耶　兵庫縣武庫郡白畑原の山上にある。

如月（きさらぎ）や若き心の針供養

正月元日にははうきを使はぬ。一年中一日として休まないから、この日だけは休ませるといふのも、はうきに對しての同情である。この心を以て召使や奉公人に對しなければならぬ。またこれは無生物ではないが、初午の日、摩耶參に馬を引いて參詣して、飼馬の無難を祈るといふのも、優しい風習と思ふ。

お　鶴（栗原玉葉筆）

お鶴　傾城阿波鳴戸のお鶴、幼い時寶劍の所在を探す爲に國を出た母を慕つて、その子お鶴が巡禮を廻國して來たのを知らずに父十郎兵衛が殺すといふ筋。

觀音の三十三番の札所廻り、六十六部のうち連れて行くのは、何となくあはれな、詩的な感じを起させるものである。これは淨瑠璃のお鶴よりの聯想からではなくして、淨瑠璃がこれを材料にしたので、卽ち人々のこの感情を利用したのである。御詠歌のあはれな調子につれて、野山に行暮れて旅するのは、人の情をたよりとするのである。これ等の人々の境遇には、いろ〳〵あはれな物語が疊まれてゐるかと思へば、そこばくの報謝を與へるのも、決して惜しくはない。田舍を旅行して、所々の門戸に「十年間諸事儉約。物もらひ入事無用」などと張出してあるのを見ると、何となく厭な感じを起す。諸事儉約はもとより結構である。しかし、人の情にすがつて旅するあはれな巡禮者などに向つて、些細な報謝が施されないであらうか。儉約してといふ聲のもとに、慈善といふ同情の心が塞がれてしまふのは、餘りに現金な世の中と思ふ。謠曲の室町時代のやうに、行暮れた旅僧に一夜の宿を貸すといふ接待まではなくとも、せめてあはれな物乞に少少の志を出すくらゐな情は、あつてもよいではあるまいか。

一六　人の新盆に

佐佐木信綱

御母上樣御逝去あそばされ候は、未だ櫻の花咲きそめぬ頃にて候ひしを、御遺愛のとて御墓近う植ゑ給ひし

些細な報謝が施されないであらうか

せめて……あつてもよい

さても……懷かしさよ

佐佐木信綱　歌人、文學博士。明治五年三重縣に生れた。

御母上樣

御思出もしげくおはしまし候らん

佛事の營にて候を

思ひ浮べ給ふべく

御手傳せさせ給ひし

御祭にておはすべからん

そのひともと、若葉の綠一入色添ひて、夏も深くなり候。何くれと御思出もしげくおはしまし候らんと、先日御墓詣して歸り來てより、殊に日々御わたり思ひ上げ居り候。さて七月も十日を過ぎて、盆も近くなり候。まことに人なきあとのせめてもの心やりは、佛事の營にて候を、殊にお別れなされてより月も未だ淺き御母上の御事なれば、その夜門に焚き給はん御迎火のひまにも、亡き御面影更に新たに思ひ浮べ給ふべく、御佛事の營につけても、御健やかにて、共に御手傳せさせ給ひし去年をしのび給ふべく、とり〴〵あはれ深き御祭にておはすべからん。さてこの品輕少ながら、御母君御生前御好

有島生馬　畫家、小說家。名は壬生馬。明治十五年横濱市に生れた。

起さゞるを得ない

物の物と覺え居り候まゝ、御手向にとさし上げ候。いづれ近きに伺ひ、よろづ御まのあたりにてとかしこ。

（文のしをり）

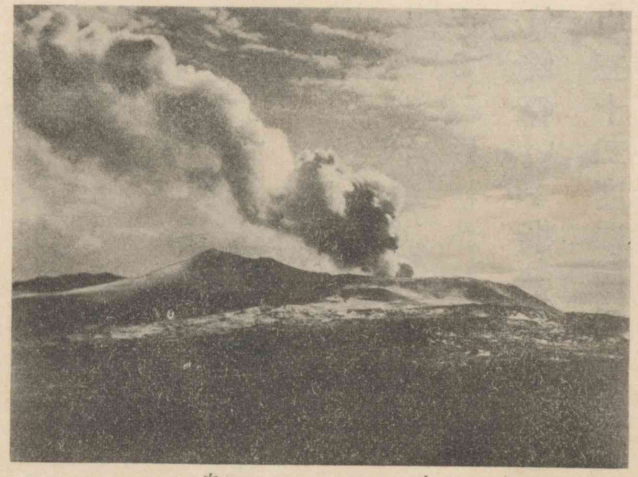
一七　桃源郷伊豆の大島

有島生馬

大島の自然は寧ろ單調で、貧弱の感じを起さゞるを得ない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層とが、その感じを深くさせてゐる。しかし、それ等を補うてなほ餘りあるものは、その氣候のいゝ事である。冬でも五六度を下らないし、夏でも平均三十二度には上らない。この海洋氣候のもたらす恩惠が、さまゞ〴〵な事に深く影響して、特殊な雰圍氣を作つてゐる

のである、植物にも、人體にも、人事にも。

一例を言へば、あしたぼ、たがやなどいふ青々した、いかにもうまさうな牧草が一年中繁茂する。その爲、大多數の島民は牛を飼ふ。その結果、內地では見馴れないさま〳〵な構圖が描かれる。或時は農家の裏庭に、或時は山腹の野原に、或時は搾乳場に。畫間はもとより、時としては暗夜に、この優しい日を有する家畜と村人との親しい組合



大島

さま〳〵な構圖が描かれる……裏庭に……野原に……搾乳場に

せが見られる。悠長な鳴聲も到る所に聞える。その乳は飲用としては殆ど無代價の有樣であるが、バタ、煉乳原料、乳糖、カセインなどに造られるから、一日二三圓になる。それによつて婦女子は樂々と獨立の生計を營む事が出來る。

牧牛の影響はこの外にもある。我我は純良な牛乳を得ると同時に、うまい子牛の肉をも十分に供給される。その上、直接東京から來るパンに新鮮なバタを添へて食ふ事が出來る。まづこれ等の食物か

バタ(牛酪) butter
カセイン casein

島の風俗

大島風景　秋元節朗筆

熱海　靜岡縣田方郡熱海町。

觀察したら

ら言ふと、旅客は歐洲の田舍にゐるやうな心持がする。新聞も鎌倉、熱海邊とは違つて、市内版が屆く。

私にとつて一番興味の中心になるものは、やはり島民そのものである。言語、風俗、建築、習慣、生活、產業、社會組織、道德、宗教など、皆一種の特色を有してゐるやうであるから、これ等を子細に觀察したら、それ〴〵面白い點があらう。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これ等には最も驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全、安定、氣稟は快活、敢爲、そして勞働を愛する。こんな抽象的な言葉を並べただけでは實況ははうふつしまいが、とにかく、彼等の生活くらゐ樂園の住人に近いのは、他に澤山はなからう。そしてこんな原始的な住民

一奇觀といふ事が出來よう

不便だつた

ほゞ……明らかになつた

一つのおきての

をもつてゐる事、それが大島の桃源郷たる第一の原因である。

大島が伊豆、相模、安房の沿海に位しながら、近年まで全く内地の文化と沒交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來た事は、世界に於ける一奇觀といふ事が出來よう。どこの國のどこに、こんな不思議な現象が見られよう。單に交通が不便だつたと言ふだけでは、とても説明しきれない程他とは異なつてゐる。私にはその原因がはつきりわからなかつた。ところが、私が島に行つた時、或故老から次の話を聞いて、ほぼその原因が明らかになつたやうに思へた。

それは、舊幕時代に甚だ妙な一つのおきての布かれてゐ

利島　伊豆七島の一。大島の西南方。周回一〇キロメートル。
新島　伊豆七島の一。利島の南方。周回二八キロメートル。
……事實で……稍明らかにされる

た事である。このおきては幕府側から言へば、島民に對する特殊な厚意的保護と言ふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたのだらう。そのおきては、「たとひ難破船、漂流者が寄つて來ても、若しそれが本土人だつたら、一物をも與へないですぐ追拂へ。但し利島、新島などいはゆる伊豆列島の住民だけは、除外例として、炭水を供給してもよい。」すべてこんな有樣だつたから、交通、貿易、移住などは絶對に禁ぜられてゐたのである。

この驚くべき慘酷な鎖國主義のおきてのあつたといふ事實で、始めて其所の生活の原始的なのも、島民が一種固有な特別の發達を遂げたのも、稍明らかにされる。

鈴木文史朗　新聞記者。名は文四郎。明治二十三年千葉縣に生れた。
大森　東京市大森區。
羽田　同蒲田區。
大磯　神奈川縣中郡。別莊地、海水浴場として知られてゐる。暑中休暇でもあるまいに

一八　夏空を飛ぶ　その一

鈴木文史朗

機は京濱國道の眞上を、つばくらのやうに一文字に飛んで行く。大森、羽田の海岸は今が書入れの海水浴場、例により鳴物入りで、旗、差物おし立ててやつてゐる。海はあいにく紺の水ではないので、ボール紙へ胡麻鹽を振りまいたやうに、人間どもが水遊をしてゐる。

横濱の上空から安房、上總の山々を左に、三浦半島の根もとを一跨ぎに大磯に出る。五百メートルの低空に舞下つて敬意を表する。漁師の暑中休暇でもあるまいに、寄席の土間にぎつしり下駄を並べたやうに、小舟が濱に上つてゐる。

三崎　同縣三浦郡。三浦半島の最南端。
辻堂　同縣高座郡藤澤町。
茅ヶ崎　同縣同郡。
二宮　同縣中郡吾妻村。
江ノ島　同縣鎌倉郡の南部海岸にある島。辨財天と風景とで古來名高い。
相模川　富士山東北の山中湖に發し、相模平野に出で相模灣に注ぐ。一名馬入川。
小田原　同縣足柄下郡。明應四年（一四九五）北條早雲が此所の城に據つて關東に覇を唱へて以來北條氏の居城であつたが、天正十八年（一五〇年）秀吉に攻められて落城した。
北條五代　早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直。

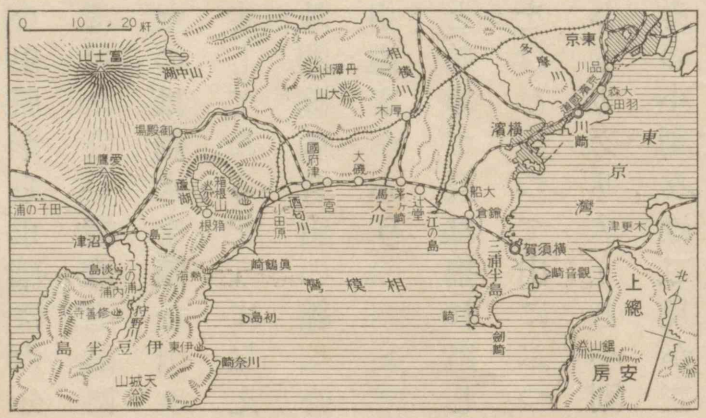
大磯の上から弓なりに彎入した相模灣の岸傳ひに飛んで行く。振返つて見ると、三浦半島の三崎邊が引きしぼつた弓弦の下の附根、他の一端は伊豆半島の川奈崎か。この滿月形の弓に沿つて、辻堂、茅ヶ崎、二宮などの町々の屋根が、庭の小池のほとりに咲いた松葉牡丹のやうにかはいゝ。江ノ島が海綿のやうに浮いてゐる。相模川を眞中に、兩岸の平野がたのもしく廣い。なぜたのもしいつて、いざとなつたら、あの邊に著陸といふ見當が附くもの。弱音のやうだが、正直なところ、これが素人客の實感だ。

二分間で小田原の上へさしかゝる。北條氏五代九十餘年の夢の跡が、長方形のちやぶだいになつてゐる。その上に玩

箱根山　足柄下郡。複雜な舊火山で、昔は東海道第一の險要とされてゐた。
激しさうだ

具のやうな家が四つ五つ。中學校だ。

此所から機首は右に向ひ、愈箱根の山にさしかゝる。箱根山は飛行機にも天下氣流の險。突然正面の操縱室の戸を操縱士が內からコツ〳〵たゝく。明けると、彼の大きな手だけがによつきり出て、紙片を落した。三人が鼻を並べて見ると、「山の氣流が激しさうだぞ。搖れても驚くな。」——「おい〳〵、おどかすなよ。」三人は思はず兩手で籐椅子の肱掛を握るだが、實際は操縱士の恫喝通



蘆湖　箱根山上にある。水澄み風光が美しい。
箱根町　蘆湖の南岸。避暑地として名高い。
三島　靜岡縣田方郡。
ひだ（襞）
マラソン　marathon

牒にも拘らず、六根清淨、お山は晴天。我等の機はすべるやうに飛んで、蘆湖畔箱根町の上に出る。小田原から正確に六分。殘念な事に、この日富士は雲の煙幕で見えない。機は三島に向つて驅下りるやうに飛ぶと思つたのは、湖水を圍む山々の幾十條のひだが、三島へ向つて競走してゐるやうに見えるからだ。壯大な山の線の動きだ。天地開闢の昔、山の線も一生に一度のマラソン競走をしたに相違なからう。

蘆湖の上から三島へ向つて行くと、始めて機は搖れ出した。駿河灣から吹く風が、三島の峽谷をはひ上つて山にぶつかるあふりらしい。搖れると言ふよりも、ガクリ〳〵と小刻みに落ちるといふ方が當つてゐる。その小刻みは二尺か三尺の感じだが、實際は五十尺、百尺はあるのだといふ。かねてから聞かされてゐたから、何だ、これくらゐかと力こぶをぬいたのはまづめでたい。

聞かされ
こぶ（瘤）

蘆湖から六分で三島の上。三島から六分で沼津の町。海岸の松林、青い狩野川、入江に次ぐ入江の連なる江ノ浦、殊に陣笠を伏せたやうな淡島あたりの美しさは、空から見て更に格別だ。

狩野川　天城山中に發して北流し、沼津に至つて海に注ぐ。
江ノ浦　靜岡縣駿東郡靜浦村。
淡島　江ノ浦の港門を扼する小島。
興津　同縣庵原郡。

沼津から海へ出て、三保の松原あたり目がけて、千六七百メートルの空中に、目に見えぬ直線を引いて行く。興津の町の上へ出て見ると、東海道線が茸の細い裂目のやうで、列車がその上を毛蟲のやうにのたくつてゐる。この毛蟲はもう

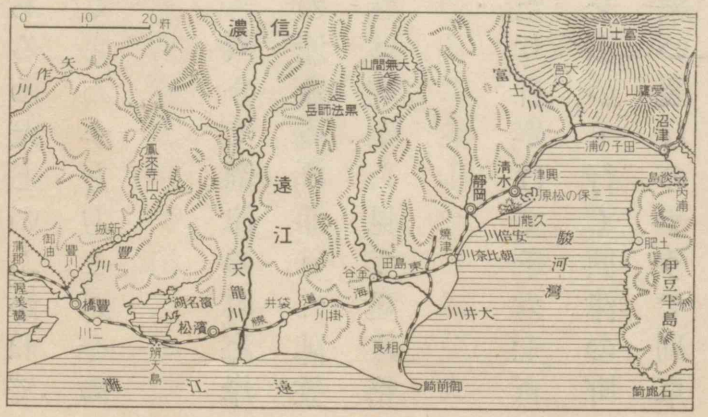
一時間半もすれば

グラウンド ground

安倍川 甲駿の境なる安倍峠に發し、南流して靜岡の西端を流れ駿河灣に注ぐ。

十二時間ものたくらないと大阪へは著かない。僕等はこの調子なら、あと一時間半もすれば、大阪ずしで晝飯の豫定である。

空から見て印象的な靜岡の眺は、歩兵第三十四聯隊の長方形なグラウンドを圍む白い兵舎と、眞黑に見える窓。それは鯨幕を張廻したやうだ。市の西には安倍川がうまさうに流れてゐる。江戸の昔、名物の餅を伊勢參の男が一盆平げて、一つ五文と聞いて驚いた。居合はせた、通な江戸



朝比奈川 靜岡縣志太郡朝比奈村に發し、西南流し燒津に於て海に注ぐ。

燒津 志太郡。漁業の中心地。

大井川 赤石山脈中の最高峯白峯山に發して南流し、沿岸に平野を伴なつて駿河灣に注ぐ。

彌次、北八 江戸時代の小說家十返舍一九の作東海道中膝栗毛で滑稽を演ずる人物。

つ子が「砂糖の高いのを知らないか。白砂糖を使ふ餅が道中どこにある。」と、餅屋に代つて辯じたとやら。白砂糖が珍しかつた時代の安倍川は、飛行機の下で同じ瀨すぢを流れてゐる。

飛行機上から見た靜岡

安倍川の上から東海道本線傳ひ二分間で、名前負けのしたやうな朝比奈川。その河口に燒津の町。燒津から二分間で大井川。維新までは海道一の難所と言はれただけに、上から見てものの凄い。「越すに越されぬ」昔語は、江戸の町人彌次、北八に

島田　靜岡縣志太郡。
金谷　同縣榛原郡。

讓らう。島田、金谷の川問屋は驛の運送屋と變り、新しく出來た大鐵橋も川下に見える。

一九　夏空を飛ぶ　その二

掛川　同縣小笠郡。
袋井　同縣磐田郡。

金谷、掛川を飛越え、袋井の上まで來ると、天龍川の下流と、西岸の廣い平野とが、もう目の下に展開する。諏訪湖から二百六十四キロメートル、信遠の山々を押分け、遠江灘目がけてころげ落ちて來るこの川は、まことに痛快なものだ。濱松には遙かに敬意を表して、四分間で濱名湖を過ぎて、ちよつとした山續きを五六分、すぐに豐川の平野に出る。豐橋市を中心に、遠くは新城町から豐川町、御油町、二川町と幾十かの

濱名湖　遠江國の西海岸。南端は水道をなし外海と通じてゐる。
豐川　愛知縣寶飯郡。
新城町　同縣南設樂郡。
御油町　同縣　飯郡。
二川町　同縣渥美郡。

町が、渥美灣の岸を底邊とした三角形の平野の中に、日廻草のやうに咲いてゐる。

御油町の上から渥美灣の水色に誘惑されて、蒲郡の上まで出て見る。駿河灣の內浦か江、浦、或は瀨戸內海の一角をもつて來たやう。後に連なる綠の天城山脈も、少女の群のやうにかはいらしい。蒲郡の上から知多半島を迂回する。三河の山と知多半島との間に挾まれた尾張の沃野が、巨大な俎のやうに長方形に廣がつて、その上にはすかひに、うなぎがのたくつてゐるのが矢作川だ。知多半島の伊勢濱傳ひに名古屋の上へ出る。見渡したところ、大風呂敷を廣げるとはこんなものかと言ひたい程、濃尾平野が廣がつてゐる。それに應

蒲郡　同縣寶飯郡。風光よく海水浴場として知られてゐる。
內浦　靜岡縣田方郡。
天城山脈　伊豆半島の中部にある火山。最高峯萬三郎山は海拔一四五〇メートル。
知多半島　愛知縣西南部の半島で、伊勢海からその支灣三河灣を分つてゐる。
うなぎ（鰻）
矢作川　長野縣下伊那郡に發し、愛知縣に入り南流して知多灣に注ぐ。

じて名古屋市も廣い。「青年都市、人口九十萬、帝國第三位」と近頃頻りに絶叫するだけの事はある。

絶叫するだけの事はある

遠くの空から見ても、金のしやちほこは文字通りこの市の金看板だ。

名古屋を日本の水力電氣の元締と威張らせる爲に、濃尾平野へ飛驒、美濃の大河がこぼれこむやうに流入してゐる。中にも木曾川が群を拔いて大きく美しい。幅廣の木綿を一反庭から海へ廣げて落したやうだ。

木曾川源を木曾山脈と飛驒山脈との間の溪谷に發し、長良川、揖斐川等の大支流を合せ、下流に大三角洲を作つて伊勢海に注ぐ。

揖斐川木曾川の支流。

木曾川を一跨ぎにした拍子に揖斐川も跨いで、桑名の上に出る。桑名は揖斐川がもつて來た土砂が積り積つて、其所から自然と湧出た町のやうに、時代の附いた色をしてゐる。上方參の客は、宮と呼ばれた熱田から、海上二十八キロメートルを渡船で此所まで渡つたものださうだ。珍しく大きな帆船が町から川を下つて、宮の方へ向つて行くのが、いかにも桑名らしい。

桑名三重縣桑名郡。

……さうだ

富田町三重縣三重郡。

桑名を過ぎて三四分で富田の町。玩具の船と言ひたいが、田圃の小川を遊弋する水すましの一群のやうに見える小舟が、無數に港にもやつてゐる。この町のあたりから機を千四五百メートルの上に高めて、伊勢海の觀望を恣にする。眞下を見ると、紺碧の烏帽子の布地に、一面に絹絲のやうな細

つばな（茅花）

四日市　三重縣四日市市。

龜山　同縣鈴鹿郡。

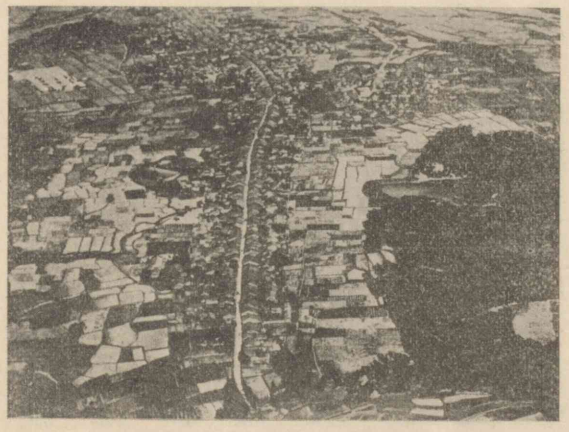
關町　同郡。

むかで（百足、蜈蚣）

鈴鹿峠　鈴鹿山脈中の一峯。海拔三七八メートル。

い線が動いてゐる。波だ。沖の方は少し荒れてゐると見えて、白い波頭がつばなの花でも咲出したやうに見える。

四日市を過ぎ、龜山を越し、關町の一本街の上に出る。この町はまるでむかでのやうだ。鈴鹿峠へ向つてはひ上つて行くのだらう。鈴鹿と言へば箱根に次ぐ空の難所だが、どうやら晴れたり曇つたりしてゐるらしい空模樣だ。愈〻鈴鹿越しとなる。關の上で鐵道線路と別れ、機首をいさゝか右にして、山脈の上にのしかゝる。名に



飛行機上から見た關町

波のうねりと……似てゐる

かうもり（蝙蝠）

フィルム film

ふさはしくかはいゝ山脈。無數に續く山のうねりが、波のうねりと驚く程似てゐる。照り曇りするので、陽光と雲影とが、そちこちの山にだんだら染に現れる。陽光の部分は燃立つやうな黃線、雲影はそれに淡墨を塗つたやう。機が陽光の下をくゞると、機影がつと山の傾斜面に映る。長大なかうもりの影だ。それが機の進むに隨つて山から谷、谷から山、時には眞下にじつとしてゐる白雲の一團の上に映る。機上から見る大自然のフィルムの

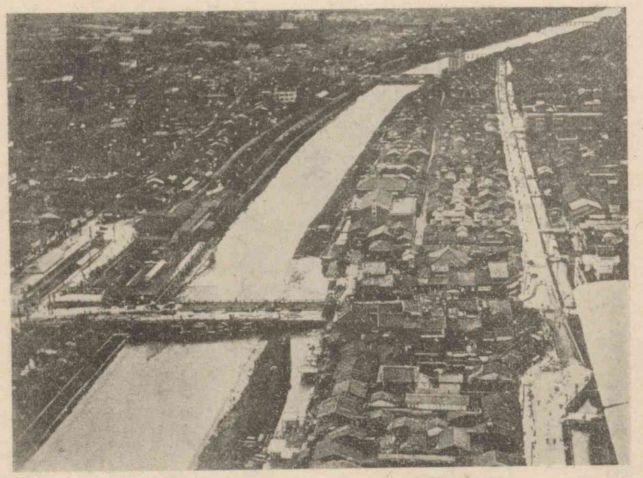
飛行機上から見た土山

土山　滋賀縣甲賀郡。
草津　同縣栗太郡。
大津　同縣大津市。
比良山　琵琶湖の西岸。海拔一一七四メートル。
沖ノ島　琵琶湖中部の小島。
竹生島　琵琶湖北部の小島。都久夫須麻神社、辨天堂がある。
汐ならぬ海

こまの變轉のうち、これ程なものはない。

鈴鹿の尾根を通り越したかと思ふと、南無三寶、機はどうやらギクリガクリと動搖を始めた。しかし幸ひ、山越えの搖れも何の事なく一すべりに下つて、小さな溪谷の町へ出る。「坂は照る〳〵鈴鹿は曇る」の古い民謠で知られた間の土山だ。土山から十二分で草津の町。草津から低空を大津目がけて飛んで行く。比良の連山が青絹の衣紋つくろつたお大名のやうに澄しこんでゐる。琵琶の水鏡に青い月代がちらちら映る。見渡したところ、沖ノ島あたりから奥は、鏡面は息を吹きかけたやうに曇つてゐる。竹生島らしいのが、指先でその上へ「ノ」の字を書いたやうに浮んでゐる。汐ならぬ海は、上か

淀川　琵琶湖の南端に發する瀨田川は山城に入つて宇治川となり宇治より、伏見を經て淀に至り桂川を入れ木津川を合せ、攝津に入つて西南流し、大三角洲をなして大阪灣に注ぐ。
滋賀、栗太　滋賀縣の郡名。瀨田川は兩郡の境界をなしてゐる。
駒もとゞろと云々　「駒もとゞろと踏鳴す瀨田の長橋うち渡り云々」（太平記）



飛行機上から見た三條大橋

ら見て益淡く優しい。宇治川となり淀川となつて、惜氣もなく湖の水を放ち出させる瀨田川が、勢ひこんで滋賀、栗太の山間を馳せて行くのが、をかしいやうによく見える。これだけは手前の鐵橋を汽車で通つても、向ふの唐橋を駒もとゞろと踏鳴して通つても、見られぬ景色である。

瀨田川口から大津の上を掠めて、疏水に沿うて五六分散歩すると、京都の屋根が扇子を

廣重　江戸時代末期の浮世繪師。安藤氏。風景畫に巧であつた。安政五年（二五一八年）歿、年六十。

沿うて　沿ら。

天翔る　空を飛びかける。

快翔する　はやく飛びかける。

憧憬　あこがれ。

開くやうに展開して來る。廣重の五十三次の最後の繪に「大尾、京都三條大橋」と記したその三條大橋も、上から見てはあつけない。川に沿うて「京の三條のまた三條、合せて六條の珠數屋町」あたりの上に出る。今朝日本橋を出てから二時間と三十五分。短くも長くもある東海道の空の旅。

飛行機の話

自修文

大地を離れ得ない人類にとつて、その頭上に廣々と展開してゐる蒼空を自由に天翔りたいといふのは、人類がこの世に生れ來て以來の欲望であつた。一雙の翼を以て輕々とこの天空を快翔する鳥類は、かうした人類の限りないあこがれの的であつた。この欲望憧憬は、一方に東西の神話、傳說の上に澤山の人間飛翔の話を殘し、一方に鳥類を模倣した飛行法を考案せしめた。我が國に於けるこの考案者の一人として、備前岡山の表具師幸吉の話が傳へられてゐる。

考案する　工夫する。

野宴を張る　野外でさかもりをする。

追放　罪人をおひ拂ふこと。

寛政　第百十九代光格天皇の御代、德川家齊の世（二四四九―二四六〇年）

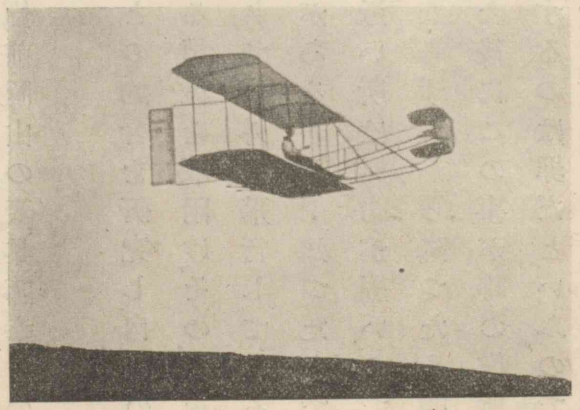
レオナルド・ダ・ビンチ　Leonardo da Vinci　イタリーの畫家、詩人、思想家。工業、理學の方面にも造詣が深かつた。（西紀一四五二―一五一九年）

幸吉は鳩を捕へて、その體軀と羽翼との釣合を研究し、自分の體重に釣合ふ翼を作り、胸にこれを操る機械を取附け、その翼を搏つて飛翔する事を考案した。一日これで郊外を飛行してゐると、遙かに下方で野宴を張つてゐる者がある。若しや知つた人ではと、近寄つて見ようとすると、地面に近い所は風力が弱いので、思はずその場に墜落してしまつた。時ならず天から降つた人間に、宴半ばの男女は驚き叫んで逃去つた。後にこの事が時の役所に聞え、慰みとは言ひ、人のしない事をするのは罪だといふので、幸吉はせつかくの兩翼を取上げられ、追放されてしまつた。これは寛政以前の事實である。外國でも、レオナルド・ダ・ビンチが鳥類

に似せた羽ばたき飛行機の設計を作つたと言はれてゐる。

しかしその後、鳥のやうに翼を動かして飛行するのは、人間力では到底不可能であり、機械力を用ひても非常に能率が上らぬ事が知られ、十九世紀の初頃からは、翼を動かさずに、いはゆるグライダーで滑空飛行をする事が考へられて來た。

一八〇九年英國のケーレーはこれの原理を發見し、その原理に基づいて種々の飛行機を造つたが、まだ成功する事が出來なかつた。またドイツのリリエンタールは長い間鳥の飛翔に就いて研究した結果、一八八九年に「航空學の基礎たる鳥類の飛翔」といふ論文を發表し、自ら種々の飛行機を造つて實驗したが、まだその成功を見ないうちに、不幸墜落慘死してしまつた。



グライダー

グライダー Glider 發動機のない飛行機。普通の飛行機と異なるのは、重心を加減する爲に搭乘席が主翼の前方にある點である。

ケーレー George Cayley イギリスの發明家。

原理 おほもとの道理。

リリエンタール Otto Lilienthal ドイツの發明家。（西紀一八四八—一八九六年）

ケーレー、リリエンタール等のグライダー研究と共に忘れてはならぬのは、我が國飛行研究家二宮忠八である。氏は明治二十三年（西紀一八九〇年）以來獨力グライダーの研究に從ひ、遂に現今の發達したグライダーと比較して少しも遜色のないものを完成したが、不幸にしてその後を繼ぐ者がなく、その研究は氏一代で絶えて、飛行機發達史上最近までその功その名の埋れてをつた事は、獨り氏のみならず、我が國民にとつても痛恨事であつた。

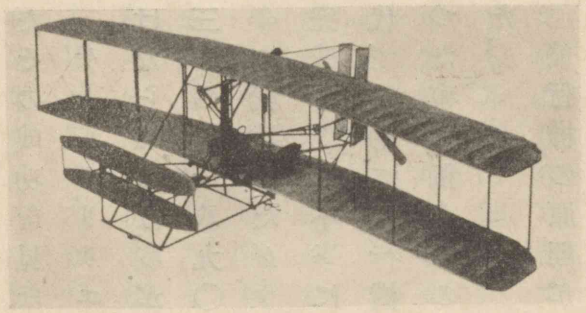
飛行機の原理が明らかになると共に、飛行機の研究は一層進んで、今までは單に空中滑走だけしか出來なかつたグライダーに發動機を据附け、人間が乘つて自由に空中を飛行しようとい

遜色 ひけ。みおとり。「遜色のない」はひけをとらぬこと。

痛恨事 非常に殘念なこと。

ふ試が行はれ、遂に一八九七年佛國のアデルが、蒸氣機關を原動力とする飛行機を發明して、三百メートルを飛行した。

この頃から重量の極めて小さいガソリン發動機が製作されるやうになつたので、飛行機は急に發達の氣運に向つた。このガソリン發動機を用ひて、現代飛行機の先鞭を著けたのは、實に米國のライト兄弟であつた。



ライト兄弟の飛行機

ライト兄弟は種々苦心した末、十六馬力の發動機を据附けた複葉飛行機を作り、一九〇五年十二月十七日、カロライナのキッティホークで四回の飛行を行ひ、最後の飛行では滯空時間五十九秒、飛行距離二百六十メートルの記錄を擧げ

アデル Ader

ガソリン gasoline

氣運 きざし。廻りあはせ。いきほひ。

先鞭を著ける 先んじて著手する。

ライト Wright 兄をウィルバー（西紀一八六七―一九一二年）、弟をオービル（西紀一八六七年―）といふ。

馬力 動力の單位。

カロライナ Carolina 北米西海岸の州。南北ある。

キッティホーク Kitty Hawk 北カロライナ州にある。

記錄 最も優秀な成績。

た。

かくて飛行機が空を飛び得る時代は遂に來た。ライト兄弟がそのおぼつかない足跡を空界に殘してからわづかに三十年足らず、現在のやうに目覺しい航空時代が出現したのである。その間の飛行機の進歩發達には、實に驚異に値するものがある。

次にその進歩の跡をたどるべく、飛行機の作つた最近の各種のレコードを一瞥しよう。

速度のレコードは一時間六百八十二キロメートルで、これは一秒間百九十メートルの割に當り、音の速さの半分以上に達する。しかし、これは特別のレコードであつて、普通飛んでゐる飛行機では、秒速四〇乃至六〇メートルくらゐである。高度のレコードは一萬三千六百六十一メートルで、勿論酸素吸入をやりながら、それでもなほ、人事不省になるかならぬかの境をさまよつて

レコード record 記錄。

酸素吸入 高度が增せば增す程空氣中の酸素が減少して呼吸が困難となるので、壓縮した酸素と酸素吸入器とを携帶して酸素を吸入する。

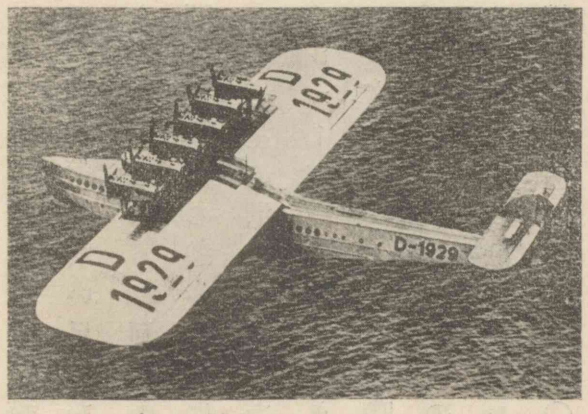
人事不省 意識を失ふこと。

空中給油　空中で飛行を續けながら甲の飛行機から乙の飛行機にガソリンを補充すること。

赤道　地軸に直交し南北極から九十度の距離にある圓。

ドルニヱー Dornier　ドックス Do-X　ドルニヱー博士の設計。

漸く成功したものである。この高さは富士山の約三倍半に達してゐる。滯空時間のレコードでは、いはゆる空中給油を行つた方では約六百四十七時間半、卽ち約二十七日、空中給油なしの方では約六十五時間半を擧げ、航續距離のレコードでは約八千八百キロメートル、赤道周圍の約五分の一に達してゐる。またその大きさを見ると、現在最大の飛行機であるドイツのドルニヱー會社製のドックス水上飛行艇は、高さ九メートル、長さ四十メートル、幅四十八メートル、五百馬力の發動機を十二箇も据附けてゐる。その艇内はちやうど汽船と同樣に上



ドックス水上飛行艇

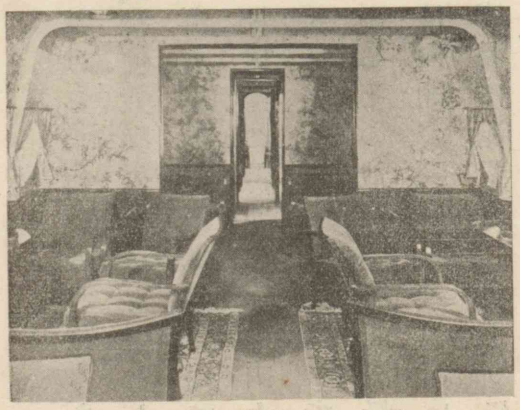
隔世の感　ひどく時代のへだたつたやうな感じ。

必須　必ず入用な。

中下の三甲板に區劃されて、下甲板には燃料、貨物等を積みこみ、中甲板には居室、食堂、寢室等があり、上甲板には操縱室、機關室、乘組員室、無線電信室等がある。これで百二十人の旅客を載せ、毎時二百キロメートルの速さで十時間くらゐ續けて飛ぶ事が出來るといふ。ライト兄弟時代と比べる時、まさに隔世の感があるではないか。

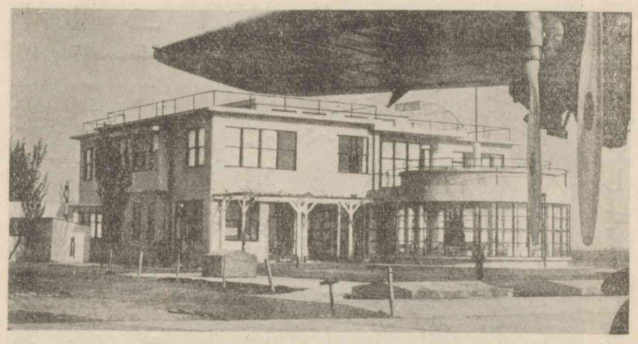
かくて飛行機の進歩發達するに隨つて、その利用の方面も非常に廣くなつた。

軍用として陸海軍共に飛行機が必須の物となつてゐる事に就いては、事新しく言ふまでもあるまい。軍用機には戰鬪機——


ドックス飛行艇の客室

または驅逐機ともいふ――偵察機、爆擊機等があり、それ〴〵職務遂行に適當した構造と設備とが施されてゐる。

實業方面に於ける飛行機の利用もなかなか盛んで、郵便、貨物の輸送を主とし、漁業上では魚群の發見に、農林業方面では播種や害蟲驅除藥の散布、または山火事の發見に、商業上では廣告、宣傳にまでも利用されてゐる。その他空中寫眞測量に用ひられては、人間の到底蹈入れない森林地帶をも容易に測量されるやうになつた。



東京國際飛行場事務所

しかし、軍用以外の飛行機の用途として最も大きな意義をもつのは、航空輸送事業であらう。日本では漸く東京、大阪、福岡、蔚山、京城、平壤、大連、新京間の毎日の定期航空路が開かれてゐるだけであるが、歐米諸國では定期航空輸送が始つてから既に十年にもなり、航空路網は非常に發達して、主要都市には必ず航空路の連絡がある。そして老若男女を問はず喜んでこれを利用してゐる。汽車で言へば停車場、汽船で言へば港にも相當すべき航空港も、ベルリンのテンペルホーフ、ロンドンのクロイドン、パリのル・ブルジェ等はその代表的なもので、あらゆる近代的設備を整へてゐる。此所に一日中、晝夜を分たず數十臺の飛行機がひつきりなしに發著してゐるのを見ては、誰しも航空時代の到來しつゝある事を覺えないではをられないであらう。

人類がこの世に生れ出て以來の長いあこがれであつた征空の夢は、今や完全に實現されたのである。

蔚山　朝鮮慶尙南道。釜山の東北方。

新京　滿洲國の首府。

航空路網　航空路が非常に發達して網の目のやうになつてゐるのをいふ。

ベルリン（伯林）　Berlin

テンペルホーフ　Tempelhof

クロイドン　Croydon

ル・ブルジェ　Le Bourgés

足立源一郎　洋畫家。明治二十二年大阪市に生れた。

身にしむ

思へる

二〇　山　二題

足立源一郎

山入りの朝程快いものはない。始めての山なら更に一入だが、幾たびか通り馴れた登路であつても、山の氣がしみじみと身にしむやうな新鮮さを覺える。殊に麓の村が新綠にきほひたつ初夏の山入りには、一段と心をときめかす色があり、薫がある。漸く手入れされたばかりの用水路に、爽かなせゝらぎを立てて勢よく流れる水は、氷のやうに冷たく齒にしみて、使ひ馴れた齒磨さへ、何か別な香と味とがあるやうに思へる。ほんたうに目覺めるやうな心持とはこんなものであらうと思ふ。

やう〳〵

落葉松の芽は綠金の湯氣が立つやうに軟かく、白かばの若葉は紺紙に撒かれた砂子のやうに大空に細かく微動する。雪解水をたつぷりと含んだ落葉の路は靴ざはりも軟かく、見上げる峯の片側はまだべつとりと一面の雪だ。まだ踏み跡の少い澤路には思ひがけぬ大きな流木がかゝつてゐたり、雪崩れのあとの押出しが所々にあつて邪魔したりする。

やう〳〵登るにつれて、雪に押された梢にほのかな紅を

落葉松―上高地の五月　（足立源一郎筆）

みなぎらしてゐる

アイゼン　シュタイクアイゼン(steigeisen)の略。

ステップ　step

おびながら、まだ起上らないたけかばが眼に附く。日當りのよい、澤沿ひの斜面には、すく〳〵と伸びた山うどが鮮かな綠に輝いて、高い香氣をみなぎらしてゐる。これは根まがり笹の芽と共に、山の泊りの食慾を誘ふ物である。よくしまつた雪面にアイゼンをくひこませながら小刻みに登る男の背に、ゆら〳〵と搖れる山うどの綠が眼にしみる。朗かに高く駒鳥の啼く音が谷を渡る。

ステップも切れない程凍りついた日蔭を過ぎると、またさくさくと雪を踏む足音が靜かに續く。立ちどまると、脚もとに遠く流れ行く水の音が聞える。ぱつくりと開いた雪の切目からのぞくと、其所に小さな瀧をなして雪解の水がほと

閉ぢられ

ばしつてゐる。初夏の山入りはたまらなく朗かだ。

霧に明け、雨に暮れる。

屋根が飛ぶかと思はれる程吹荒れた夜半の風が止んで、また霧に明け、雨に暮れる。

かうした日が三日も四日も續く事がある。わづかな明取の窓は全部閉ぢられて、ほの暗い小舍の内には、どこからともなく吹きこむ霧が漂ひ、すべての物はぬれ靴のやうに濕つぽく冷たくなつてしまふ。新しい登山者は登つて來ず、日程を限られた者は窮屈な雨具に身を固めて、元氣なくおりて行く。そのたびに濛々と立籠めた戸外の霧雨が、冷たい風

くさりきつた顏

垂れる、

シュラーフザック schlaf-sack

と一緒にさつと流れこむ。

何故こんなに降るのだらうと、すつかりくさりきつた顏を所在なく擧げると、黑く燻つた天井の所々に、明るい點々の散在するのを發見する。ぱら〳〵つと砂礫を吹附ける音がしてしづくが垂れる。吹返された爐の煙が大きく輪を描いてから全體に廣がつて、だん〳〵薄く消えて行く。爐端にのべた防水のシュラーフザックの中だけが唯一の安全地帶で、また常に快適な暖かさを保

白かば—尾瀨原の初夏　（足立源一郎筆）

場所なのだ

伊良子清白 詩人。名は暉造。明治十年鳥取縣に生れた。

つてくれる場所なのだ。頸のあたりで締めた袋の中に入つて、たゞじつと寢て暮す幾日かの單調な生活、ごーつと鳴り渡る風の音を追ひながら、風向や風速を想像する外には、完全に無爲無碍な心境、そこに始めて原始の日の清澄さを覺え、悠久な自然への親しみを感ずる。雨の山嶽のわびしさは、人の心を自然へと呼返す大きな力である。

この閑寂にして清朗な境地は、雨の山小舍に降りこめられた者のみが味はひ得る妙味ではなからうか。

二一　蟲賣

伊良子清白

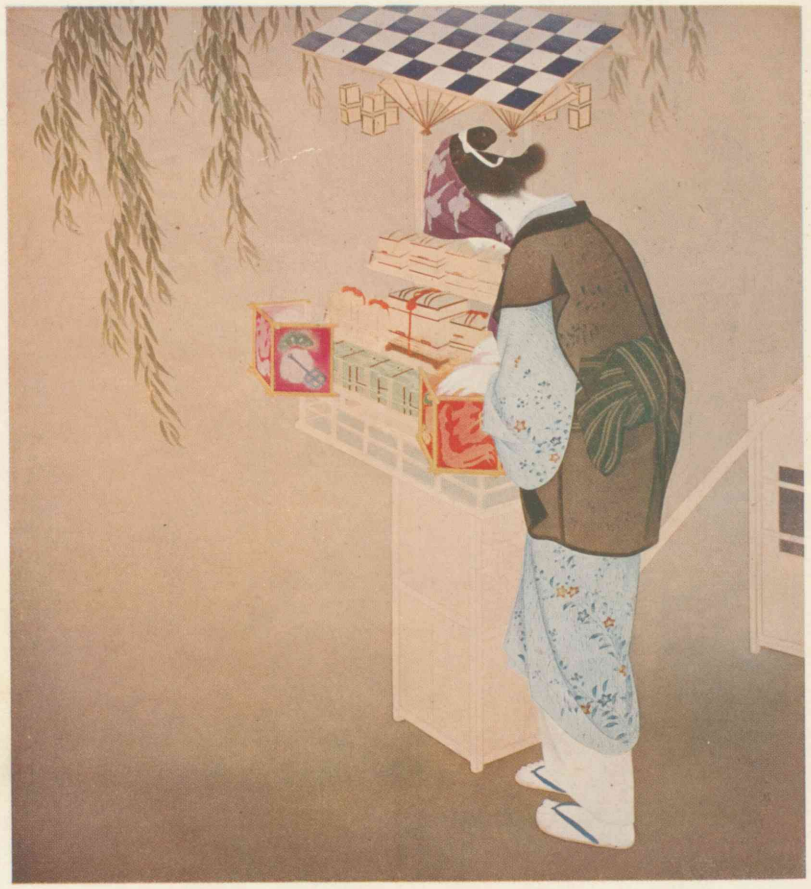
「松蟲、鈴蟲、くつわむし、

蟲めせ蟲めせ、かごも候。
四條小橋のたもとには、
八瀬の蟲うり早も出る。

旅籠（はたご）の軒のみぎはには、
水の高瀬のせゝらぎや。
柳は暗く月明く、
蟲のこゑ〳〵流れゆく。

都大路のともし火も、
秋の野らなる蟲の聲。
殘る暑さの石疊、

高瀬　高瀬川。京都市内の賀茂川、宇治川の間を南北に通ずる溝渠。



蟲　賣　伊藤小坡筆

さすがに露のおきまさる。

空は秋風人波の、
上吹き越ゆる涼しさに、
「蟲めせ蟲めせ」蟲うりの、
聲も消えゆく高瀬川。

歌人にして
必ずしも遜色ありと言ふべからず

二二　太田垣蓮月尼

蓮月尼は近世の有名なる歌人にして、これを平安朝に輩出せし幾多の才女に比するも、その詩才に於て、必ずしも遜色ありと言ふべからず。況やその一生涯は數奇に富みて、面

況や……於てをや

寛政三年。第百十九代光格天皇の御代。一二四五年。

知恩院。京都市東山區華頂山の西麓。淨土宗鎭西派の總本山。

達せしかば

貞淑なりしかば

白き節あるに於てをや。

尼は寛政三年に生れ、幼名をお誠といふ。父は傳右衞門光古とて、京都知恩院の廣間侍なり。お誠は天性怜悧にして、最も和歌を善くし、且文章も人にすぐれ、筆蹟さへも麗しかりしかば、兩親の寵愛一方ならざりしが、その母はお誠の幼き頃世を去りぬ。

かくて月移り歳逝きて、お誠は妙齡に達せしかば、江州彦根の近藤何某を迎へて壻となせり。親に仕へて至孝なるお誠は、夫に對してもまた貞淑なりしかば、父子、夫婦の間頗る圓滿なりき。とかくするうちに、傳右衞門は初孫を抱きて、年來の憂を忘るゝ身となり、かくて夫婦の間には四人まで子

舉げたりしに

言ふべくもあらず

……だにあるに……さへ

ためらふべくはあらねど

老先短き父の……落膽もやせん

思ひ捨てつ

を舉げたりしに、いかなる宿世の業かありけん、四人の子はいづれも夭折せり。一家の悲歎言ふべくもあらず、加ふるにお誠三十三歳の厄年といふに、その夫また病にかゝりて歿せり。四人の子を先立てたるだにあるに、その夫にさへ後れしかば、お誠はいたく浮世の無常を感じ、あたら綠の黑髮を切捨てて、法名をば蓮月と呼べり。もとより世をはかなみし身なれば、頭を圓むるにつゆためらふべくはあらねど、かくては老先短き父のいかばかり落膽もやせんと、殊更髮を剃落さずして、たゞ切下となし、且法衣をも身には著けざりしかど、心のみは眞實の尼法師となりて、深く〳〵人をも世をも思ひ捨てつ。

すぐれたるより

こぼち去りぬ

決心と……節操との……

泣きくらしつゝ

されど周圍の人は蓮月を捨てざりき。卽ちその容色の極めてすぐれたるより、或は再婚を勸むる者あり、或は入夫を申しこむ者ありて、その煩はしさに堪へざりければ、蓮月は秤の錘もて、我と我が前齒をば悉くこぼち去りぬ。この恐しきふるまひによりて、尼の强き決心と堅き節操との知られければ、これより後は、絶えてさる事言ふ者なきに至れり。

かくて蓮月四十歳の頃、その父身まかりぬ。

たらちねの親のこひしきあまりには
墓に音をのみ泣きくらしつゝ

といふ歌は、この時詠みけるなり。父の存命せるばかりに尼姿とならずありけるが、今はその父も世を去りければ、こゝに始めて純然たる圓頂緇衣の沙門とさまをば變へつ。

さまをば變へつ
もとより貧しき身の……

もとより貧しき身の、尼となりてひたすら佛に仕ふるのみを許さゞれば、蓮月はなりはひのたづきにとて、陶器を製造する術を覺え、それに自作の和歌を燒附けてひさぎしに、いたく世人の愛づるところとなりて、「蓮月燒」の名忽ち世に高まりぬ。この頃は岡崎に住みければ、その歌にもこのわたりの景色を詠ぜるもの多し。

ひさぐ（鬻）
ひさぎしに

岡崎
今京都市左京區
詠ぜるもの

冬畑の大根の莖に霜さえて
あさ戸出さむし岡崎の里

都ばかりにはあらで、蓮月の名の諸國に弘まるにつれて、弟子入りを志願する人の多かりけれども、蓮月は「敷島の道

弘まるにつれて

定家　藤原定家。鎌倉時代初期の歌人。仁治二年（一九〇一年）歿、年八十。

住まざりけり

山さとはまつの聲のみきゝなれてかせふかぬ日はさびしかりけり

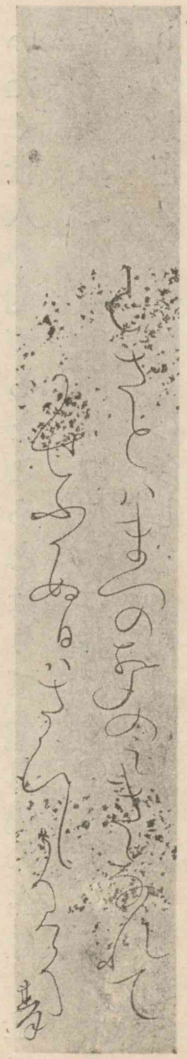
蓮月

西賀茂　今京都市上京區。

には、定家以前には師匠取りといふ事はなかりき。たゞ古歌の心を以て師とせられよ」とて、これを辭みけり。されどなほうるさく申しこむ者の絶えざりければ、彼方へ移り此方へ引越し、同じ所に二歳とは住まざりけり。よりて誰言ふともなく「屋越（やこし）の蓮月」とあだ名するに至りぬ。

浮雲のそこにこゝにとたゞよふは
きえせぬまでのすさびなりけり

と詠ぜしはこの時なりけり。而して最後に洛外西賀茂なる



蓮月尼筆蹟

明治八年　二五三五年。

貞操の正しく道心の堅かりしは……

神光院の境内に庵を結びて、移り住みぬ。

露の身をたゞかりそめにおかんとて
くさひきむすぶ山のしたかげ

かくて明治八年二月八日、八十五歳を一期として、大往生を遂げぬ。

願はくは後のはちすの花の上に
くもらぬ月を見るよしもがな

これその辭世なり。家集を海女の刈藻といふ。

蓮月尼の一生は、人倫の際遇に於て極めて不幸なりき。されどその貞操の正しく、道心の堅かりしは、後の世の婦女子の鑑とすべく、殊にその和歌に至りては、得易からざる天才

として、永へに欽仰すべきなり。

（田中嘉三郎の文に據る）

小笠原長生　舊肥前唐津藩主。子爵。海軍中將。宮中顧問官。慶應三年（一八六七年）生。

東郷元帥　東郷平八郎。海軍大將、元帥、侯爵。鹿兒島縣の人。昭和九年歿、年八十八。

二三　東郷元帥とその母　その一

小笠原長生

赫々たる大勳績と神の如き大人格とを久遠の青史に輝かせる東郷元帥は、昭和九年五月三十日午前七時、廣大無邊なる聖恩と、全國民の涙ながらの祈願との中に永へに現世を去られた。

まことや　まことや精忠の權化であり、國家の至寶であつた東郷元帥の偉大さは、今更言ふまでもない事であるが、親炙實に四十年、朝夕恩寵を忝うした私としては、元帥の高德をしのぶにあたり、今更感慨深いものがある。

知らねばならない　東郷元帥を知るには、まづその母堂を知らねばならない。「平八どん、御奉公を大切にな」。

東郷元帥と其の名署

明治三十四年　二五六一年。　この一言を遺言として、明治三十四年四月十日の曉天、梅花香ばしい一室に愛兒、愛孫たちに取繞まれて、眠るが如く逝いた。

逝いた　元帥の生涯は、尊くもゆかしいものであつた。

刀自が九十年の生涯は　古今の歴史や史傳を繙いて見ると、偉人と賢母との關係

刀自くらゐ……鮮明なのは
出來ようはず。

齊彬島津齊彬。薩摩藩主。安政五年（一八五二年）歿、年五十。

靄々たる

を證據だてる事蹟が澤山にあるが、中でも東郷元帥と益子刀自くらゐこの色彩の鮮明なのは稀であつて、刀自の爲人や言行を知つたなら、誰でもこの名婦の子に凡庸者が出來ようはずはないと肯かれるであらう。

刀自は薩摩藩士堀與三左衞門の三女で、二十歳の時同藩の士東郷吉左衞門實友に嫁した。まだうら若い身で嫁いだ刀自が覺悟の基礎となしたのは、眞心の二字であつて、これを唯一のお守として、何から何までまめ〳〵しく立働いたので、一家はまことに和氣靄々たるものであつた。

文武二道に達した上、正廉を以て鳴つてゐた實友は、やがて名君齊彬（なりあきら）侯の知るところとなり、郡奉行、高奉行、御納戸奉

家にある事さへ

誤なかれ

仲五郎實良こそ……

行等の要職に擧げられ、一意公務に盡瘁し、家にある事さへ稀だつたので、家事は一切刀自に委せてゐた。隨つて刀自は責任の重きを知り、誤なかれと願ふの餘り、堅い信仰を持つやうになつたのである。

刀自は子福者で、四十一歳までに五男一女を擧げたが、三十六歳の時儲けた四男仲五郎實良こそ、後の東郷元帥その人である。

何とかして愛兒を品性の高潔な人間に育てあげたいものと、日夜心を碎いた刀自の苦心と努力とは並大抵のものではなかつた。例へば、愛兒たちが臥てゐる時、用事あつてその室を通られる際でも、決して頭の方は歩かず、わざ〳〵そ

たとひ親でも

…をして…しめる

の足先を廻つて通る程であつた。

「この子供たちは、將來有爲の人物になる者だ。たとひ親でもその頭上を踏むやうな事は、自然彼等を輕蔑する事になり、延いては彼等に自屈の念をも起させる事になるから、必ず愼まねばならぬ」。

と、家人等を戒めると共に、愛兒たちをして自重の念を起さしめる事に努めたのである。

この賢母にはぐくまれて、仲五郎はすこやかに生ひ立つて行つた。天性敏捷な仲五郎は、その智慧の發達にも恐しい程の閃きを見せた。元帥が十歲の時、彼は自分の敏捷を試す爲に、或日、田圃の中を流れる水際に立つて、小刀を揮つて「え

破つてこそ…なれ

何の自慢になる

こそ…あつたが

氷砂糖のあるのを見出した

いつ」と小鮒の群に切下し〳〵、また〳〵くうちに數十匹を切つて得意滿面だつた。この事を隣人から聞いた刀自は、元帥を膝下に呼附けて、容を正し、

「武士は大敵を破つてこそ譽になれ、小魚を切つた事など何の自慢になる」。

とたしなめた。得意の鼻を折られた少年は、その時こそ不平滿々であつたが、母の道理ある諭には反抗も出來ず、漸く自省し、行を改めたといふ。

ところが、この賢母が十歲の仲五郎にあやまつたといふ話がある。或日の事、戸棚に氷砂糖のあるのを見出した仲五郎は、母に、

「氷砂糖を下さい」。

とせがんだ。母は何氣なしに、

「もうありません」。

と答へた。これを聞いた仲五郎はほくそ笑んで、何か肯いてゐたが、母がゐなくなると、戸棚からその氷砂糖を取出して殘らず食べてしまつた。歸つて來た母がこれを知つて問ひたゞすと、

「だつて、ないものがなくなるわけはないでせう」。

と平氣な顏でやり返した。刀自は、さつき「もうない」と自分に嘘を言つたのを、仲五郎の言葉から深く恥ぢ省みて、自ら戒め、十歳の仲五郎に心から詫びたのであつた。

だつて

恥ぢ省みて

西南の變　明治十年（一八七七年）二月、五三私學校の生徒に擁せられた西郷隆盛は、政府に問ふところありと稱して兵を擧げ、熊本城を圍んだが、九月官軍に敗れ、城山の戰に隆盛は自殺し、亂は平いだ。

くは（鍬）

遺骸を……觸れたくない

借りず

見るからに

明治十年の西南の變には、東郷家の長男四郎兵衞實猗（さねが）、三男莊九郎實次は薩軍に投じたが、實猗は負傷し、實次は戰死したので、戰友等はその屍を毛布に包んで假埋葬をして置いた。戰後、これ等戰死者の死骸を發掘して、祖先の墓地に埋葬しようとして、工夫たちは實次の假埋葬の場所へも向つたところが、刀自は工夫たちを斥けて、

「愛兒の遺骸をすき、くはの類で觸れたくない」。

と、他人の力も借りず、たゞ一人、兩手で土を掘返し〳〵、最後まで掘續けたので、終には指先は傷つき、血はほとばしり、見るからに痛々しかつたと、今でも鄕里の一話になつてゐる。

かやうに烈しい性質ではあつたが、やがて元帥に夫人の

なられてからは

他を戒めてをられた

高陞號を云々
明治二十七年七月二二日、清國政府が英國からやとつた船で高陞號といふ陸兵二千餘を朝鮮へ送らうとした。途中擊沈した。
日清戰爭
明治二十七年六月から同二十八年四月に至る日清兩國間の戰役。

興入があり、自分は未亡人になられてからは、一家の事はすべて夫人任せとして、かりそめにも干渉がましい事はしなかつた。常に、

「善い妻となるのはもとより大切な事であるが、良い姑となるのは一層大切な事である。」

と言つて、自身を省み、他を戒めてをられた。こんな風だつたので、元帥夫人との間は、他から羨まれる程和やかで、家庭には朗かな笑が絶えなかつた。

後元帥が、浪速艦長として高陞號を擊沈し、まづ日清戰爭の火蓋を切つて以來連戰連勝、少將に昇任した上、常備艦隊司令官として、大功を建てて凱旋された時、刀自は我が子を

申し上げやう

私にかう語られた

變遷しようとも

迎へて上座に直し、

「これ皆天子樣の御威光で、何とも申し上げやうはございませぬ。」

と恭しく兩手を突いて挨拶されたので、さすがの元帥も感極まつて平伏し、たゞはら〳〵と落涙されたといふ。

二四　東鄕元帥とその母 その二

大正八年春、元帥が東宮御學問所總裁として、沼津御用邸に伺候した際、孝道に就いて、私にかう語られた事がある、

「孝は百行の基といふ事は、時勢がいかに變遷しようとも、決して變らぬ道理である。孝はもと〳〵親を慕ひ、親を大

切に思ふ至情から出るのであるから、これがないやうでは忠節を盡す事も、信義を守る事も、誠心誠意から出るはずがない。それば かりでなく、何事にも眞實が缺けるに相違ないから、よし一時の僥倖は得る事があつても、つまりは失敗に終るにきまつてゐる。自分は人物を觀察するには、その親への仕へぶりを見るのが一番よいと思つてゐる。」

この談話の內容は、決して新しい說ではないが、何事も實行の上でなくては口にしない元帥の言葉となると、そこに無限の價値を生じ、肅然として襟を正さゞるを得ない。

元帥は八十八の高齡に至るまで父母を慕うてをられた。

これがないやうでは

正さゞるを得ない

慕うてをられ

嚴しい顏を微笑に解かせて

をりにふれ、話題が兩親の事に及ぶと、あの嚴しい顏を微笑に解かせて、小兒のやうに、親の事どもを、重い口でそれからそれへと語り續けられるのである。辭令を賜はり、または皇室から頂戴物などあつた時、何をおいても父母の靈前にこれを供へ、

「父上、母上、これを頂戴いたしました、どうぞお喜び下さい。」

と、目前に父母在す如き面持と、優しい言葉とで報告されるのであつた。

父母在す

元帥がてつ子夫人と結婚されたのは明治十四年二月の事で、當時元帥は三十五歲、海軍少佐で天城艦副長の職にあつた。てつ子さんは鹿兒島の志士として有名な海江田信義

明治十四年二月四日。

……人であつた。が……

憂なからしめたばかりか……

マッチ箱張りさへ……

内職までして

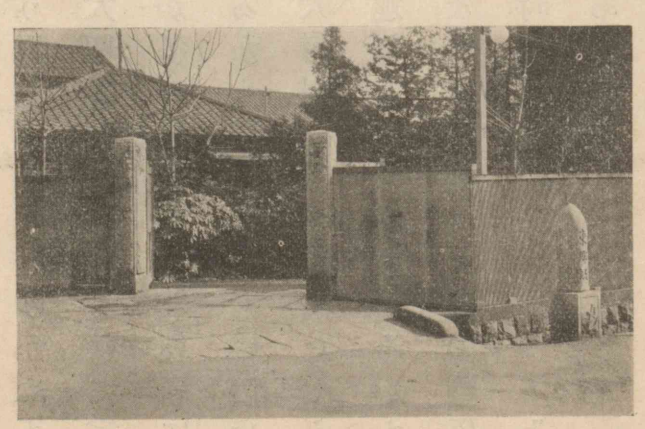
の長女で、時に二十一歳、極めて溫厚な謙遜深い人であつた。が、海軍軍人として、殆ど海上にあつて家事を顧みる暇のない夫君をして、後顧の憂なからしめたばかりか、貧しい家庭の經濟を切りもりして、暇々には母堂と力を併せて内職かせぎにマッチ箱張りさへやられたといふ。質素を旨とし、無駄を省くのは勿論、かうした涙ぐましい内職までして貯へた金で、麹町區上六番町に家附の土地を買取られた。東郷坂と名附けられて、今では東

東郷元帥とその夫人

重く見られたとみえ

京名所の一つとまで數へられる今の元帥邸がそれである。その時の引越の荷物が、二つの柳行李と、若干の臺所道具だけだつたといふ。夫人の苦心は並大抵ではなかつたらう。

元帥はこのよき内助者を得られた。家庭に後顧の憂なく、君國の爲に盡されたのだが、婦人の忍從といふ事を何よりも重く見られたとみえ、私の四女が嫁いで行く際、告別に元帥を訪ね、將來の心得をとお願ひしたのに對し



東郷元帥邸

さう

はめようと

來たやうだ

て、元帥から次のやうな懇な諭の御言葉を頂戴した、

「世の中といふものは、何事もさう思ひ通りにはゆかぬものだ。そこで堪忍といふものが大切になつて來る。殊に家庭の事は理窟では通らぬ場合が多い。それを一々理窟にはめようとすると破綻が生ずるから、堪忍第一と覺悟せねばならぬ。この節は婦人方が大層强くなつて來たやうだから、堪忍などいふ事は、時代遲れとして嫌はれるかも知れぬが、一度自分が人の妻となつて、家庭に直接の關係をもつやうになつたら、獨身の時には無暗に强がつてゐた者も、しみ〴〵思ひ當る事があるだらう。

さてその堪忍といふものは、誠心から發する事が多いので、先方の御兩親や御良人を大切に思はれたなら、自然堪忍强くなられるものだ、さうして幾久しく繁榮ある事を望みます。」

味はふべきは

圓滿でありながら

得て

元帥の御言葉は一々御尤である。中にも味はふべきは「家庭の事は理窟で通らぬ場合が多い。それを一々理窟にはめようとすると破綻が生ずる。」との一句である。家庭によつては、極めて清純であり、圓滿でありながら、どことなく溫味を缺いてゐるものをよく見受ける事がある。これ等は得て主人なり主婦なりが理窟に陷りたがり、それを押通さうとするところから起るのである。

元帥の言、まことに味はふべきであらうと思ふ。

水町京子　歌人。本姓名は宮坂道子。明治二十四年高松市に生れた。
暴風雨めいた　あらしのやうな。
慈父　いつくしみ深い父親。
白玉といへど云々　白玉にたとへてもまだ〳〵足りない……の意。
虔深き　つゝしみ深い。
にぎ面　柔和な顔。
まなざし　めつき。

自修文

東郷元帥の墓に詣でて

水町京子

九月九日

朝から暴風雨めいた風が吹いてゐて、時々烈しい雨がさつと降過ぎては、また薄日がさして來る。出足を止められた私は、仕方なく机の前に坐つた。其所には昨夜讀返してゐた「聖將東郷平八郎傳」がある。元帥の御寫眞がある。慈父のやうな愛に充ちた靜かな元帥のお眼が私の方へ向けられてゐる。

白玉といへど足らはず虔深き

そのにぎ面の大きしづけさ

何といふ尊いまなざしだらう。人間にもこんな尊い姿があつたのだ。私はもう雨や風を氣遣つて、この思ひ立つたお墓詣を止めてなどをられない。すぐ支度をして家を出た。

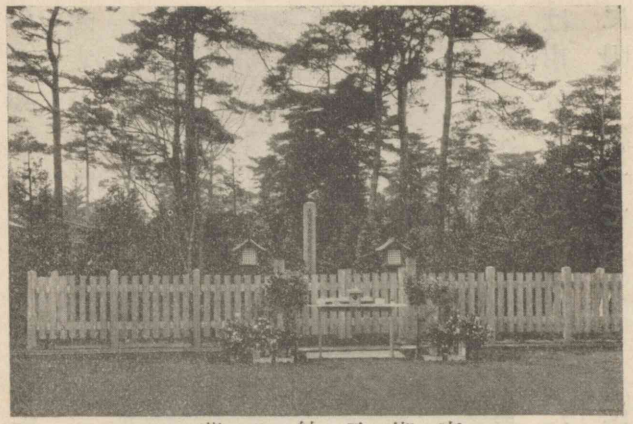
快よく走る電車　この電車は東京市四谷新宿から八王子市へ通ずる京王電車線の電車。
なでし子（撫子）
市公園墓地前　京王電車線の停留所。
バス　bus　乗合自動車。このバスは市公園墓地前から多磨墓地入口まで行く。

快く走る電車の中にゐる間も、あのもの深いお眼に守られてゐる心地がして、不思議に心が澄んで行く。窓を掠めて栗の大木が走り過る。たわゝになつた青毬栗のすが〳〵しさ。穂に出て靡く芒の波間には、薄紅のなでしこの花もそれと見える。武藏野の秋は既に深い。

と、俄に、窓硝子を打つて降出した雨、大粒の烈しい雨はすばやく野を淨め、人の心を淨めて、霽れてしまつた。電車は市公園墓地前に著いた。「東郷元帥御墓所」といふ木標がまづ目に附く。待つてゐるバスに乗る。驛前の道を一、二折して、車は今しがたの豪雨に洗はれた鋪裝道路へ出る。沿道の桑畑は稍強い風

多磨墓地入口

に吹立てられて、狂ほしく波打ち、翠の露をふりこぼしながら、車體に觸れてはね返る枝もある。やがて車は櫻並木の中を快走して墓地前にとまる。お手向の花を調へ、松風の音を聽きながら正門に入る。まづ心の引緊まつて行くのを感ずる。小石を敷詰めた廣い道、石は半ば乾いて、塵一筋止めぬ淸らかさ、整然と刈込まれた兩側の植込、踏行く足もおのづから調うて來る。道の眞中に杉の大木が天に沖して立つてゐる。その邊からはお墓所のさまが手に取るやうに見えて、參詣の人々の顔も懷かしく見遣られる。



東郷元帥の墓

天に沖して
高く天に突立つて。

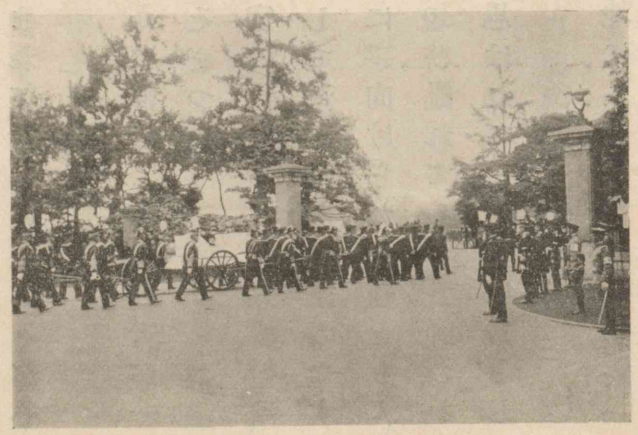
老人（おいびと）をいたはりあゆむ人のあり
おくつきみちの松風の中

おくつき墓。

母人であらう、八十近いと思はれる品のよい老人を、兩方から支へるやうにして、靜かに歩みをみ墓所へ運ぶ人、見てゐる私の眼には涙がにじんで來た。

みたらしの水を
そゝぎて秋草の
花つゆながら
手向けまつらん

手を洗ひ、口を漱いで、私も人々にまじつて御墓前に歩み寄る。元帥海軍大將從一位大勳位功一級



東郷元帥の國葬

侯爵東郷平八郎之墓」と書かれた御墓標の鮮かな墨の色、ともすれば涙に曇る眼にもまざ〳〵と讀まれて、新しい悲しみが心の底からこみ上げて來る。

花をお手向けし、手を拍つて、心靜かに額づく。松風の音が一しきり高まつて、波の遠のくやうにひそまつた。

軍令部總長宮、海軍大臣、軍事參議官の供へられた大眞榊は、紅白の木綿四手に飾られて、嚴かな、そして淨らかな、御靈のやすらひ所を作つてゐる。その前には心々に手向けられた色とり〴〵の花が、をりからの日の光に映えて、匂ひ亂れてゐる。元帥のお德を慕ふ人の數がどんなに多いかゞ思はれて、また更にありし日の元帥がしのばれる。

國こぞり惜しみまつるも天地に
かよふ誠を君はもたせし

墓標　はかのしるし。
まざ〳〵　はつきり。
軍令部總長宮　伏見宮博恭王殿下。
海軍大臣　大角岑生。
軍事參議官　天皇の惟幄の下に重要な軍務の諮詢にお答へ申す軍事參議院を構成する一員
木綿四手　木綿で作つた四手。四手はしめなはなどに垂らすもの。
國こぞり云々　國を擧げて惜しみ申すのも道理である……の意。

元帥の功績の大きさは世界に比類がない事で、申すまでもないのであるが、人としての元帥の尊さは、その誠にあつた。あの御佛の慈眼にも比すべきまなざしは、天地に通ふ誠を持つてゐる人のものである。夙くから外國の人たちを心服させられたのも、その將軍としてのりつぱさに加へて、この誠を持つてをられた爲であらう。

おほ天地にかよふ誠におのづから
海彼の國の人もなびきぬ

昭和四年の海軍記念日、元帥はあの慈父のやうなまなざしで、兒童の大群衆を見渡して、

「どんなに才氣があつても、また力があつても、眞心が缺けてゐては、決してほんたうの御奉公は出來ないのでありますから、どうぞ正直にして、誠の道を踏違へないやうにお願ひいたし

海彼の國　海の彼方の國。
御奉公　君國の爲につくすこと。

ます。」

と訓へられた時、三萬の兒童はおのづから肅然として、咳一つしなかつたといふ事である。誠に徹した元帥の口から述べられてこそ、この言葉にそれだけの力があつたのである。

私はお墓所に近い噴水塔によつて、歸る事を忘れた人のやうに、何時までも立つてゐた。參詣の人々は次々に拜をしては散つて行つた。

すぐれた尊い御靈が靜かに眠つてゐられる所、松風の音の朝に夕べに永遠の音樂を奏でる所、――私はあの慈眼に守られてゐる心地で、去りがたいその所を後にした。

肅然として　ひつそりとして。

二五　日本の至寶

徳富蘇峯

世の中に日本の歴史程りつぱな歴史はない。

古へは我が日本國をば豐葦原の瑞穗國と言つてゐたが、アメリカ合衆國を見ても、支那を見ても、物質的には日本より多く惠まれた國である。日本はさ程石炭にも富んでゐない。日本には金山も少い、石油坑も少い。

しかしながら、日本には他國に決して比類のない、美しい歴史がある。これは實に大和民族の至寶である。またこれが大和民族の生命である。然るに、古來我が國民はこの歴史を餘りに粗末にしてゐるのではあるまいか。

外國の歴史に於ては、爭は概ね君主と人民との爭である。

徳富蘇峯　歴史家、評論家。貴族院議員。名は猪一郎。文久三年（一八六三年）肥後（熊本縣）に生れた。

世の中に……ない

さ程……富んでゐない

決して……ない

概ね……爭である

未だ曾て……ない

帝王と人民との爭である。ところが、日本の歴史には未だ曾てかゝる爭はない。

成程戰爭はあつた。けれども、その戰爭は人民と人民との戰である。時としては皇室内に於ける爭もある。皇室の或御方と或御方との爭が元弘の亂である。人民と人民との爭が卽ち應仁の亂である。

徳富蘇峯

爭が……亂である

かう言へば、或は異議を唱へる人があるかも知れない。承久の亂はどうかといふ人があるかも知れない。しかしながら、承久の亂は、後鳥羽院が北條氏を誅伐せられたもので、北

後鳥羽天皇　第八十二代。

北條氏　北條義時とその一族。

北條氏は……敵たうたけれども

考は……なかつた

條氏はたゞ止むを得ず敵たうたので、北條氏の方から、お上を攻めたのではない。さうしてまた、北條氏はお上に敵たうたけれども、北條氏にも帝位を奪はうなどといふやうな考は髪の毛程もなかつた。

支那では王侯將相種あらんやで、いかなる場合でも、人民が君主に敵たふ時には、これに取つて代らうとしてゐる。黥布が漢の高祖に向つて謀叛した時に、高祖が何を苦しんで反するかと言はれたら、帝たらんと欲するのみと答へた。日本で逆賊の標本にされてゐる北條義時でも、その心事は帝たらんとしたのでなく、彼一族の安全を保たうとしたのであつた。日本の歴史に於て、臣民が朝廷に敵たうた唯一の例

黥布　支那漢代の人。高祖を輔けて淮南王に封ぜられたが、韓信等の誅せられたのを見て、禍の己に至らん事を懼れて反した。

高祖　名は劉邦。項羽と共に秦を滅し、後項羽を垓下に破り、天下を定めて帝位に卽いた。西紀前一九五年歿。

王莽　前漢の平帝の世に榮爵と政權とを得、外戚となり政を攝し、終に帝を弑して位に即いた。在位十四年で豪族に殺された。（西紀二三年）

曹操　三國の魏の始祖。後漢の獻帝を擁して四方を征し、河北を定め、魏王となつた。（西紀一五一―二二〇年）

司馬懿　魏の武將。曹操及びその子文帝に仕へて功があつた。廢帝芳の時丞相を殺してこれに代つた。（西紀一七六―二四九年）

董卓　後漢の武將。獻帝を擁して權を專らにし、都を長安に遷して暴虐を行ひ、その臣に殺された。

朱溫　五代梁の太祖。唐の昭帝を弑して唐の天下を奪つた。

袁世凱　清代の政治家。清朝滅びて民國となつて後、內閣を組織し、大總統となり、皇帝に推されたが成功しなかつた。（西紀一九一六年）

とされてゐるこの事でも、事實はさうである。

なほ皇室に對して事を企てたものとされてゐる人物には弓削道鏡があり、相馬將門があるが、相馬將門は檢非違使にならうといふのが目的であつた。今の時代で言へば、警視總監になれなかつたから、自分の選擧區へ歸つて、少し暴れたといふくらゐの事である。あれを以て直ちに漢の王莽と、魏の曹操とか、司馬懿とか、董卓とか、朱溫とか、若しくは近き袁世凱などに比するのは、寧ろ彼を買ひかぶつてゐるものである。

弓削道鏡に關してはいろ〳〵の說があつて、或は彼は天智天皇の孫に當る。臣民になつてゐるけれども、皇胤である。

彼ですら

嵯峨　京都市右京區。

天龍寺　臨濟宗天龍寺派の大本山。具さには靈龜山天龍資聖禪寺。足利尊氏が後醍醐天皇の冥福を祈る爲に建立したもの。

それであゝいふ事を考へたのだらうといふ說がある。思ふに弓削道鏡といふ人は、誇大妄想狂に過ぎない。かゝる人物の事を以て、日本歷史の全體を汚すものとするには足らない。

日本の歷史にはいかなる場合でも、臣民が皇室に對して弓を引くといふ事はない。足利尊氏は逆賊と言はれてゐるが、彼ですら未だ曾て一度も皇帝にならうといふ心を起してゐない。のみならず、非常に恐れ入つてゐた爲に、嵯峨の天龍寺は出來てゐる。尊氏でさへも天皇に對つて弓を引くのは、その本心でなく、彼の心は常にその恩寵を思つて、その冥福を祈つてゐたのである。況や尊氏以外の者に於ては言を

伊藤博文　政治家。舊長門萩の藩士。憲法の制定その他に大功があり、大勲位公爵が上つた。明治四十二年（二千五百九十九年）歿、年六十九。

山縣有朋　政治家、軍人。舊萩藩士。維新の後文武の諸官に歷任し、陸軍大將公爵に上り、元帥に列せられた。大正十一年歿、年八十五。

大久保利通　政治家。舊鹿兒島藩士。維新の際參與、參議兼内務卿等に任ぜられ、功があつた。西鄕、木戸共に維新の三傑と稱せられる。明治十一年（二千五百八十七年）歿、年四十七。

須ひない。日本國民は歷史上勤王に徹底してゐる。

この國民的根本思想をよく看取してゐたのは、織田信長である。織田信長は日本に於ける近世的人物だ。信長時代からが吾人の時代である。信長は我等にとつては、伊藤博文の如く、山縣有朋の如く、大久保利通の如く見える。乃ち信長は近世的人物の先驅者だ。そして信長程、古今に亙つての能率家はない。信長の一身は能率の結晶だ。彼は苟も能率の存するところ、どこまでもやつて行つた人である。若し信長に、日本が皇室なしに行けるといふ見こみがあつたならば、どこまでやつたか知れない。

近世日本に於て、勤王家としてはまづ信長を擧げねばな

何故にそれ程勤王に熱中したかと言へば：：事を會得してゐたからである。

勤王でなければ：：出來ず

らぬ。信長が何故にそれ程勤王に熱中したかと言へば、勤王でなければ天下を統一する事は出來ず、勤王でなければ日本を治める事は出來ない、日本は天皇の日本であるといふ根本原理を、徹底的に了解し、天皇を戴かねば、日本を治める事が出來ないといふ事を會得してゐたからである。

信長程の人間が、勤王でなければ日本は治らない例を示したから、秀吉も家康もこれを遵奉した。もとより江戸幕府は勤王の程度が時々違つたけれども、勤王を廢止した事もなく、無視した事もない。私はこの點に就いて、實に日本の歷史はりつぱなものであると思つてゐる。

（言志小錄）

二六　祖先を崇び家名を重んず

社會學上から上代の我が國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。卽ち祭政一致の狀態で、治者は神祇上も神もひとしくカミであつた。政治は卽ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。また一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は卽ち大家であつた。かういふ事は强ち我が國に限つた事ではない。原始社會にはいくらも類例のある事である。たゞそれが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで殘つてゐるといふ事が、甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例をなしたものと言

來つて

つて宜しい。支那の文明を吸收し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で、今日まで變遷をなして來たに拘らず、この太古の政體に伴なふところのカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心卽ちマゴコロを今日まで少しも失はず、それで何等の爭亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體をなし得たといふのが、面白いところである。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に闊步して行けるといふのが、我が國民の强みである。

……行けるといふのが……强みである

さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつてゐるものは、言ふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して

これと同時に

卽ち……といふ事が

これを畏敬し、これを仰慕する念がなければ、もとよりこのやうな政體の成立つわけがない。神話の神々は、一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致されたのである。天照大神は日の神、月讀命は月の神、素戔嗚尊は恐らくは風の神であらうが、これと同時に、我が民族のうちで、殊にすぐれた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祀つて御祭をするといふ事、卽ち共同の祖先を崇拜して、そこに一致團結の政治が行はれるといふ事が、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫にお下しになつて「コレヲ視ルコト吾ヲ見ルカ如クセヨ」と仰せられたのは、祖先崇拜といふ事を明らかにされたのである。卽ち三種の神器をお承傳へになつた御方が、祖先の正統、政治上の元首で、いはゆるカミで、且オホヤケであるのである。それ故、皇位の繼承には、三種の神器が最も大切な物になつてゐる。語を換へて言へば、我が國體上からは、どうしても祖先崇拜といふ事を忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國では、これが國家と結び附いては何の意味をもなさぬ。ローマやギリシャにもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續してゐるから、祖廟を尊み、これを祭る事は、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ

祖先崇拜は……あるが

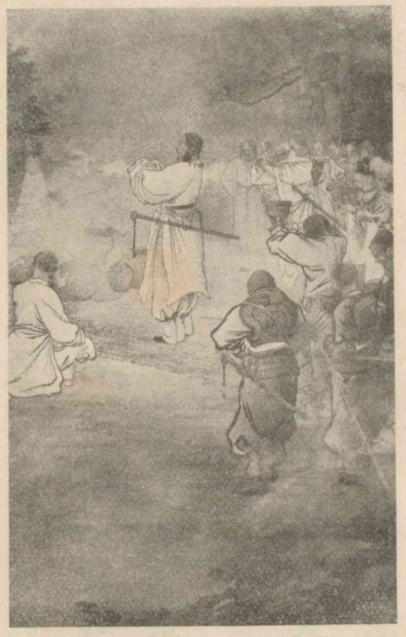
これが……意味をもなさぬ

ギリシャ（希臘）(Greece

鳥見山　奈良縣磯城郡城島村外山であるといふ。

大寶令　第四十二代文武天皇の大寶元年（一三六一年）に出來た。

關係をもつてゐる。神武天皇が御卽位式に神籬（ひもろぎ）を鳥見山に作つて、祖宗をお祭りなさつたのは、卽ちこれが爲である。今日でも毎年一月四日の政治始には「先ヅ伊勢神宮ノ事ヲ奏ス」といふ事があるが、これは大寶令時代からの定りで、これを以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のある事である。宣戰、講和の詔敕を發し給ふ時に、神宮にお告げになるのも、その意味からである。宮中に賢所があつ



鳥見山（伊藤龍崖筆）

これが爲

臣民たる者

……に外ならぬ

て、海外へ出向く人、または歸朝した人などが拜謁と同時に參拜を仰せ附けられるのも、この政體の上からの意味をもつてゐる。「日本は神國なり」と昔から人の言ふのはこれが爲である。神と言つても、後世に發達した各派の神道を言ふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題たる宗教の自由といふ事には、何等の關係がない。苟も日本の國土に生れて、日本の臣民たる者は、カミとオホヤケとに對する眞心から、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつた事である。

女子新國文新訂版　卷三終

昭和七年五月二十七日印刷
昭和七年五月二十日發行
昭和七年十二月二日再版印刷
昭和七年十二月十五日再版發行
昭和十年十月十日訂正三版印刷
昭和十年十一月五日訂正三版發行
昭和十年十一月八日訂正四版印刷
昭和十年十一月十日訂正四版發行

著作權所有

女子新國文
（新訂版）

定價	
第一—六卷	金六拾錢
第七—八卷	金五拾九錢

編訂者　芳賀矢一
訂補者　橋本進吉

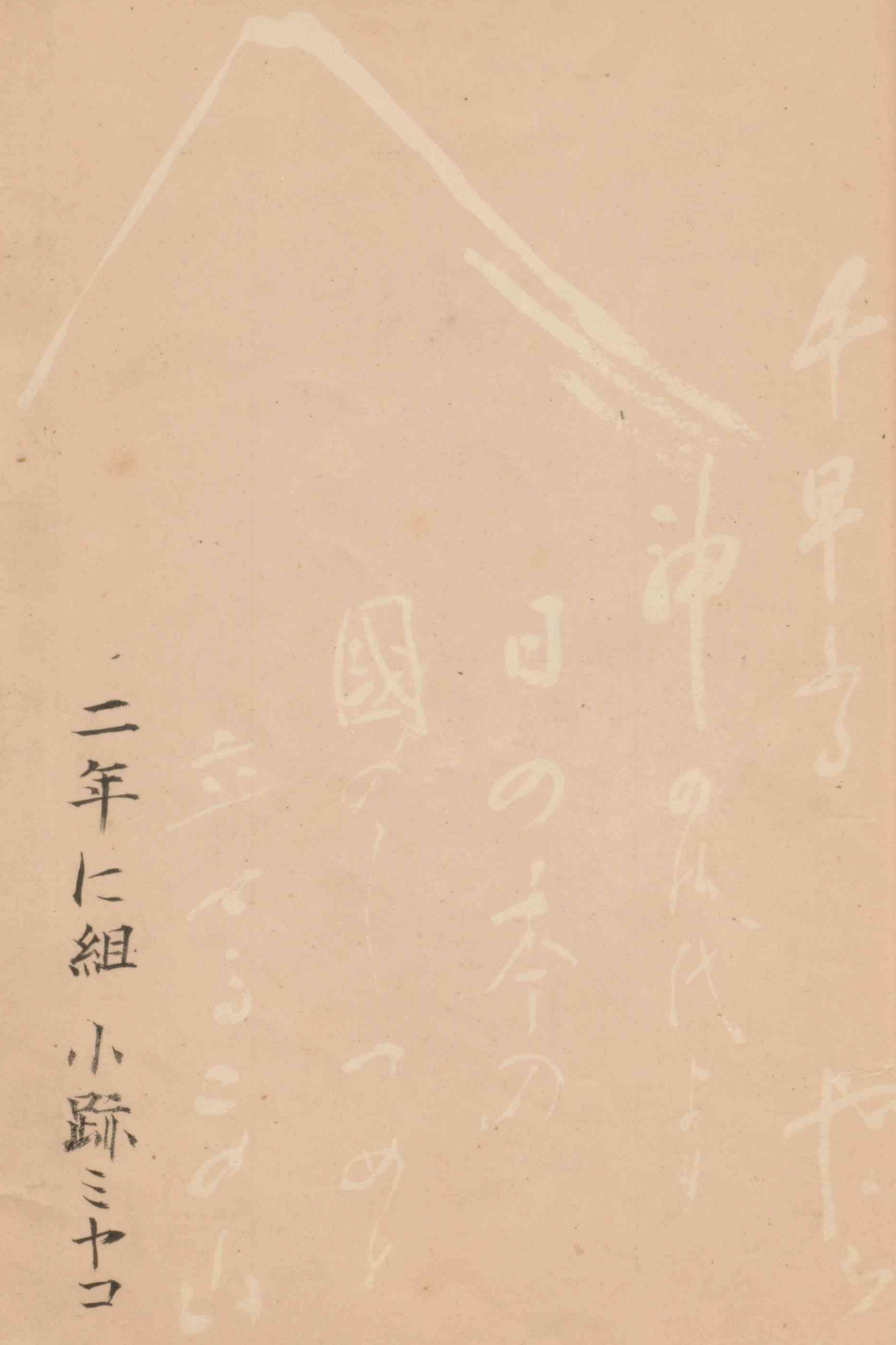
發行者　東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房
同所冨山房社長

代表者　坂本嘉治馬

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷市谷工場

發行所　（明治二十九年六月設立）
東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社　冨山房
電話神田代表二、一七一—二、一七八番
振替口座東京五〇一番

浦野製



二年に組　小跡ミヤコ